

國

語

卷三

改訂版

3759
Iw1
資料室

42050

教科書文庫

4
810
41-1937
200030
2354

812
1937

Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

3759
Iw1

日一十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國校學中

岩波編輯部編

國語

岩波書店刊

改訂版

猫
圖



筆
六
文

渡邊
華山
筆

廣
島
大
學
書
庫
印



國語 卷三 目次

一 大和言葉	五十嵐 力	一
二 島四國	荻原井泉水	六
三 春三題	吉村冬彦	四
四 春駒	高村光太郎	三
五 雨	山口青邨	三
六 千本松原	伊藤左千夫	六
七 天德寺了伯	湯淺常山	七

八	青木新兵衛	室鳩巢	四〇
九	伊達政宗	新井白石	四四
一〇	興國の樞	内村鑑三	四九
一一	日本海海戦		五五
一二	東郷元帥と乃木大將	安倍能成	六〇
一三	妹に與ふ	吉田松陰	六六
一四	心の小徑	金田一京助	七二
一五	焚火	志賀直哉	七八
一六	金華山	長塚節	八三
一七	雑草	齋藤茂吉	八八

一八	風	北原白秋	九三
一九	昆蟲の本能	フーブル	九九
二〇	石をきざむ	石川啄木 窪田玄徳	一〇五
二一	鴉勸請	柳田國男	一一〇
二二	學者の苦心	芳賀矢一	一一六
二三	天下第一人	渡邊崋山	一二〇



五十嵐力
 國文學者
 文學博士
 早稻田大學教
 授
 米澤市の人
 明治七年生
 稗田杉屏
 千葉縣の人
 海上胤平
 歌人
 千葉縣の人
 大正五年歿
 年八十八
 小出榮
 歌人
 御歌所寄人
 江戸の人
 明治四十一年
 歿 年七十八

國語 卷三

一 大和言葉

五十嵐 力

老農友稗田杉屏氏の話である。

日本の古語には、簡単な裡に、實に奥深い眞理を含んだのが
 あるものです。いつぞや——もう二十年にもなりませう
 か——海上胤平といふ歌人が、小出榮といふ人の歌を評した
 中に、小出氏の歌に「牛牽きかへる云々」とあつたのを咎めて、外
 國は知らず、我が國では、昔から牛には「追ふ」と言ひ來つたもの
 であるのに、「牛を牽く」といふのは、落著かない詞遣だと云つた

のがありました。當時私はそれを見て、歌人なんて暇つぶしにくだらん事を云つて楽しんで居るものだと思つて、馬鹿にして居りましたが、其の後十數年経つて、はつと思つたことがあります。

それはかういふわけです。

或日、牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の男にあづけて出してやりましたが、程なく走つて来て、乞食橋の向ふまで行くと、牛が坐りこんで、どうしても動かなくなりまして、といふのです。「意氣地のない弱蟲だ。それぢや、お前が行つて手傳つてやれ」と云つて、小力のある他の男を附けてやりましたが、暫くすると、それが又歸つて来て、「二人でも、どうしても立ちません」と申しました。「馬鹿な奴だ。二人掛りで牛一

板橋
舊東京府北豊
島郡板橋町
現東京市板橋
區の内
乞食橋
現同市豊島區
の省線大塚驛
附近に在つた

匹動かせない奴があるか。それぢや五平、お前行つてやれ」と申しますと、五平は「情ない奴だな。それぢや己が一つ立たしてやらうか」と云つて、威勢よく出かけて行きましたが、暫くすると、それもまた歸つて来て、「旦那、どうしても動きませんよ。今日はどうかしたんですな。打つても、叩いても、引張つても、だまして、ちつとも利きませんや」と申しました。私は、「をかしい事だ。しかし己が行けばどうにかなるだらう」と怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男共には多少優つた一日の長とを頼みにして急いで行つて見ますと、成程、牛の奴が或邸の裏門の前に、大磐石と腰を据ゑて居り、まはりには眞黒に人だかりがして居ります。それから私は三人の男に手傳はせて、鞭打つたり、あやしたり、いろ／＼と工夫をして見ま

二島四國

荻原井泉水

荻原井泉水
名は藤吉
俳人
東京市の人
明治十七年生
讚岐
讚岐國
現香川縣
小豆島
瀬戸内海中の
島
香川縣に屬し
屬島と共に小
豆郡を成す
弘法大師
空海
日本眞言宗の
開祖
承和二年（一
四九五）歿
年六十三

「島四國」とは讚岐の小豆島を遍歴する事である。弘法大師の徳を慕ふ者が、大師の足跡を尋ねて四國八十八箇所の靈場を巡拜する事を「遍路をする」といふ。併し、四國一圓を遍歴する事は、時間に於ても、體勞に於ても、なかなか容易ではない。で、小豆島の八十八箇所を遍歴すれば、其の功德は全四國を一巡したのと同じであるといふ事が、いつ頃よりかいひ出されて、「島四國」といふ言葉も出來たのである。私は先頃、其の「島四國」をして來た。かうして遍路する者は「お遍路さん」と呼ばれる。私も亦「お遍路さん」の一人として歩いて來た。尤も、私は功德・利益を願ふ爲でもなく、又單に風景

を観る爲でもない。



小豆島風景

私は此の小豆島とは或因縁があり、其の爲に懺悔行願をしたいからであつた。併し、其の事をこゝに書くのではない。たゞ私が遍路として歩きつゝ、幾分でも自分の心が安らかになり、靜かに此の島の風光に眼を開くといふ氣持になれたのは、やはり一つの「救」として佛に感謝すべきものだと思ふ。其の心持から、私は此の佛地の風景と遍路の風俗とを少しく話したいと思ふのである。

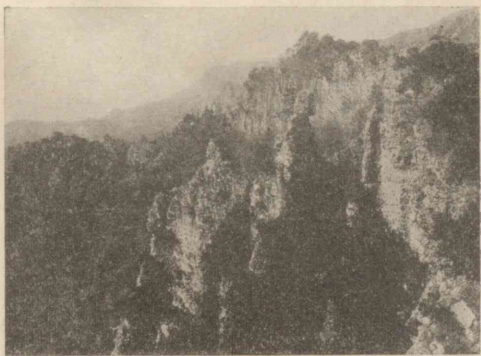
小豆島は紅葉の名勝寒霞溪を以て知られてゐる。否、寒霞

寒霞溪
小豆郡大部村
に在る

坂手港
小豆郡坂手村
の港
小豆島の東南
坂手灣に臨む
草壁
同郡草壁町
坂手港の西北
内海灣に臨む

淡路
淡路島
瀬戸内海中第
一の大島
兵庫縣に屬し
津名・三原兩
郡を成す

溪は知られてゐるが、小豆島は知られてゐないといふ方が當つてゐよう。寒霞溪に遊ぶ人は、坂手港又は草壁に船を著けて、登つて降つて、其の船で歸つてしまふ。島の廣さを知らず、島の名さへ注意しない人が多い。小豆島といふ名は非常に小さな島のやうに聞えるが、海岸線四十里に近く、瀬戸内海に於ては淡路に次ぐ大きな島で、面積こそ淡路とは比較にならないが、沿岸の屈折が多いので、海岸線の延長は殆ど淡路に等しい。そして、此の島の自然の美しさは海岸に近い山水の變化にあるので、山中の名勝ともいふべ



寒霞溪

石門洞
草壁町に在る

き趣の寒霞溪一つを以て此の島の風景を代表せしめることは出来ない。やつぱり全島を一周すべきである。全島を一周するには所謂お遍路道に依るのがよい。お遍路道は、往昔弘法大師が此の島を一巡された時の道其のまゝだといふこととて、其の時殊に風景の好い處々に杖をとめて休息せられた場所が、其のまゝ、八十八箇所の靈場として残されたといひ傳へてゐる。寒霞溪も亦遍路道に當つてゐて、そこには第八番石門洞地藏菩薩がある。かくて、單に此の島の風景を見る爲にも遍路道が一番好く、歩くにもやはり「お遍路さん」として歩くのが一番好いと思ふ。
お遍路さんとして歩くには、些か支度がある。檜笠、金剛杖、頭陀袋、腰蒲團などいふものだが、これはつまり徒歩の旅に極

めて便利なものとして、長い経験の後に定められたものである。日光を避けるだけならば麥藁帽子でも好い譯だが、晴にも好く、雨にも役立つといふには、檜笠に如くものはない。海邊を歩く時にはステッキでも好いけれども、山路にかかつた時にも役立つには金剛杖にかぎる。頭陀袋はズックの鞆よりも軽い。殊に腰蒲團といふものは、小さな蒲團を紐で腰にくゝるやうにしたもので、歩く時は尻の先に垂れてゐることも忘れてゐて、土の上にも岩の角にでも、



お 遍 路 姿

腰をおろす所に自然と敷かれるのは重寶である。笠の表には法句を書いたり、又は「四國遍路同行二人」と書いたりする。同行二人とは弘法大師と自分と二人といふ意味で、これこそ遍路行願の中心になつてゐる心持である。

島を遍路して最も氣持のいゝ事は、「お遍路さん」といふ親しげな言葉にも現れてゐるやうに、島の人達が、他國から入りこんで来る遍路に、遍路であるが故に親しんでくれ、又遍路同士がお互に同伴者として扶け合はうとすることである。道端の家には、「せつたい」といふ旗が出てゐたり、又「接待あります」と紙札が貼つてあつたりする。そこでは強飯、牡丹餅などを馳走してくれる。又、塵紙などをくれる家もある。或時には俵屋が接待をする。それはお遍路さんであれば、俵に無賃で乗

せてくれるのである。俵屋は、今日は大師さんを幾人乗せた」などといふ。「お遍路さん」はつまり「お大師さん」なのである。

遍路は「南無大師遍照金剛」といふ語をとなへながら、といふよりも、寧ろ歌ひながら行く。麗かな春の日でもあれば、其ののつたりとした浪のやうな調子が青く静かな空氣にとけて、人の心をなごやかにほぐしてくれる。遍路は又鈴を振りながら行く。其のちり／＼といふ響が、麥畑から鳴きのぼる雲雀の歌と和して、一層長閑な感じを誘ふ。かうした遍路と遍路とが逢ふと、「お早いことです」「御苦勞様です」と言葉を掛け合ふ。又同じ方面に行く同士であれば、巡拜する場所がきまつてゐることとて、食事の都合などで後や先になつても、あちこちで又落ちあふうちに、いつか本當に親しく話しあふ

やうになつてしまふのである。一つ道を行つて戻るやうな所では、荷物を道端に置いたり、辨當を木の枝に懸けて置いたりするが、遍路の物は紛失することは決してないさうである。忘物に氣がついた時は、其の方角に行く遍路に言傳をすれば、それを取つて、指定の場所へ、其の方へ来る者に持たせてくれる。遍路とて善人ばかりではないが、遍路をしてゐる時は弘法大師と共に居るといふ氣持で、お互に親切を盡くし合ひ、扶助し合ふ。かうして、實に氣持の好い一つの世界を作つてゐる。それゆゑ、こゝに遍路して歩く人は、さうした光明遍照の世界に遊行しつゝ、大慈大悲を禮讚するといふ氣持になれるのである。

(旅の茶話)

吉村冬彦

本名寺田寅彦

物理學者

隨筆家

理學博士

東京帝國大學

教授

帝國學士院會

員

東京市の人

昭和十年歿

年五十八

三 春三題

吉村冬彦

春が來ると、自然の生物界が急に賑やかになる。いろいろの花が咲き、いろいろの蟲の卵が孵化する。氣候學者は、かういふ現象の起つた時日を歲々に記録して居る。其のやうな記録は農業其の他の参考になる。

例へば、或庭の或櫻の開花する日を調べて見ると、勿論特別な歲もあるが、大概は四五日位の範圍内にあるのが通例である。これは何でもないやうで、随分不思議な事である。開花當時の氣温を調べて見ても、必ずしも一定して居ない。無論其の間際の數日の氣温の高低は可なりの影響をもつには相違ないが、それにしても、此の現象を決定する因子は其の當時

氣象要素表
氣温・氣
風向・風速・雲・雨
量
湿度

の氣象要素のみではなくて、遠く溯れば、長い冬の間から初春へかけて、一見活動の中止して居るやうに見える植物の内部に行はれて居た變化の積算したものが發現するものと考へられる。

そこへ行くと、人間などはだらしのないものである。仕事に忙しかつたり、病氣をしたりして居ると、いつの間にか柳が芽を吹いたり、櫻の苔が膨らんだりして居て、急に氣が附いて驚く事がある。それ所か、うつかりして居る間に學年試験が眼の前に來て居たりする。

眠つて居るやうな植物の細胞の内部に、ひそかに併し確實に進行して居る春の準備を考へると、何だか恐しいやうな氣もする。

植物が生物である事は誰でも知つて居る。併しそれが「いきもの」である事は、通例誰でも忘れて居る。

或日、私は活動寫眞で菊の生長の状況を見せられた事がある。先づ映畫に現れたのは、一つの小さな植木鉢であつた。其の眞中の土が妙に動くと思つて居ると、すうと二葉が出て來た。それが見る間に大きくなり、其の中心から新しい芽が泉の涌くやうに涌き上り延び上つた。延びるに随つて、莖の周圍に簇生した葉は上下左右に奇妙な運動をして居る。それは恰も自意識のある動物が、我々には不可知な或感情を表す爲に藻掻いて居るやうにも思はれ、或は又充實した生命の歡喜に躍つて居るやうにも思はれた。やがて莖の頂上にむ

くむくと一つの團塊が盛り上つたと思ふと、瞬く間に其の頭がばらばらに破れて、數十の花弁が花火のやうに放散した。そして、絶大な努力を仕遂げて喘いでても居るやうに波打つて居た。そこで惜しい事に映畫はふつと消滅してしまつた。私は何だか恐しいものを見たやうな氣がした。何でもない草花がみんな「いきもの」だといふ事を、これ程明白に見せつけられたのは始めてであつた。

日本の春は太平洋から來る。

或日、二階の縁側に立つて、南から西の空に浮かぶ雲を眺めて居た。上層の風は西から東へ流れて居るらしく、それが地形の影響を受けて上方に吹きあがる所には雲が出來て、其處

甲武信嶽
埼玉・山梨・
長野三縣に跨
がる
海拔二四八三
米
箱根
箱根山
神奈川・静岡
兩縣に跨がる
海拔一四三九
米
丹澤山
神奈川縣愛甲・
津久井・足柄
上三郡に跨が
る
海拔一五六七
米
大山
同縣愛甲・中
兩郡に跨がる
海拔一二四六
米

に固定して居るらしかった。磁石とコンパスでこれ等の雲の大凡の方角と高度を測つて、そして雲の高さを假定して算出した其の位置を地圖の上に當つてみると、西は甲武信嶽から富士箱根や伊豆の連山の上にかゝつた雲を、一つ／＼指摘する事が出来た。箱根の峠を越した後再び丹澤山大山の影響で吹き上る風は、鼠色の厚味のある雲を醸し、それが旗のやうに斜に靡いて居た。南の方には、相模半島から房總半島の山々の影響もそれと認められるやうに思つた。高層の風が空中に描き出した關東の地形圖を裏から見上げるのは、不思議な見物であつた。其の雲の國に徂徠する天人の生活を夢想しながら、なほ遙かな南の地平線を眺めた時に、私の眼は豫想しなかつた或物にぶつかつた。それは、遙か

な遙かな太平洋の上を蔽つて居る積雲の堤であつた。典型的な、もく／＼と盛り上つた圓い頭を並べて、隙間もなく並び立つて居た。都會の上に擴る濁つた空氣を透して見るので、それが妙な赤茶けた温かい色をして居た。それはどうしても冬の雲ではなくて、春から夏の空を飾るべきものであつた。庭の日陰は未だ霜柱に鎖されて、隣の栗の樹の梢には灰色の寒い風が揺れて居るのに、南の沖の彼方からは、もう桃色の春の雲がこつそり頭を出してのぞいて居るのであつた。こんな事に始めて氣附いて驚いて居る私の鼻の先に突き出した楓の小枝の一つ／＼の尖端には、ルビーやガーネットのやうに輝く新芽が、もう大分芽らしい形をして膨らんで居た。

(寺田寅彦全集)

高村光太郎
詩人 彫刻家
東京市の人
明治十六年生
三里塚
千葉縣印旛郡
遠山村に在る
牧場地
御料牧場
宮内省下總牧
場

四 春 駒

高村光太郎



三里塚の春は大きいよ。
見果てのつかない御料牧場にうつすり
もうあさ緑の絨毯を敷きつめてしまひ、
雨ならけむるし露ならひかるし、
明方かけて一面に立てこめる杉の匂に、
しつとり掃除の出来た天地ふたつの風
景の中へ

春が置くのは生きてゐる本物の春駒だ。

〔出所〕
現代詩人全集



すつかり裸の野のけものの清浄さは、野
性さは、愛くるしさは、
ああ、鬣に毛臭い生き物の香を靡かせて、
ただ一心に草を喰ふ。
かすむ地平にきらきらするのは、
尾を振りみだしてまた駈ける
あの栗毛の三歳だらう。
のびやかな、素直な、うひうひしい、
高らかに荒つぽい
三里塚の春は大きいよ。

五 雨

山口 青 邨

山口青邨
名は吉郎
鐵山學者
俳人
工學博士
東京帝國大學
助教授
盛岡市の人
明治二十五年
生

雨が降る、しとくしとくと降る。表も裏も濡れた新緑である。楓は枝を葉を層々相重ね、その上を雨が流れてゐる。檜の新しい葉も濡れて、てかてか光つてゐる。その外、櫻の葉も、椿の葉も、八つ手の葉も、何も彼もが濡れて輝いてゐる。僕の庭に面白い木が二本ある。一本は錦木である。もう一本は苗代菜莢である。錦木の新緑はいゝ。あの細かい枝を澤山入組ませて、柔らかな葉を一ぱい茂らせ、もくもくと新緑の叢むらを作つてゐる。それに今、細かい白い花が一ぱいに咲いて、ほろりくと地にこぼれてゐる。

雨がその上にしとくと降つてゐる。濡れそぼつた葉先から、雫が白く膨らんではぼたりと落ちる。重なつた葉は雨を漏らさじと頼もしくも屋根を作り、その下に小枝が小暗く梁天井を作つてゐる。

もう一度、こぼれた花の上に眼をやる。花はいつ溜るともなく溜つて、木の下が圓く眞白になつてゐる。そして、地上にひいてゐる絲のやうに細い水筋を傳つて、とろりと幾つかの花が流れてゐる。そして、庭の眞中に廣がつてゐる潦たぎに流れて行つては浮かぶ。

苗代菜莢の若葉も亦美しい。錦木によく似た葉で、柔らか
に圓味を帯び、枝など殆ど見えないほど茂りに茂つてゐる。
若しその葉の中に頭を突つこんで覗いて見るならば、そこに

隠元豆の粒位の青い實がかぼそい軸にぶら下つてゐるのを見つけるであらう。末生の瓜の如くにたよらない青さをして下つてゐる實だ。だがもう少し経つと、それがもつともつと膨らんで眞紅に色づき、蜜のやうに甘く熟するのである。僕の田舎では、丁度田植の頃、苗代菜萁がそこゝの垣根に赤く熟する。僕等は山の鳥のやうに、すばしこくそれを見つけては取つて食べた。眞紅な菜萁の尻には雨雫がしたゝつてゐる。手を伸ばしてそれをつまみとつては口に抛りこむ。水つばい甘さが舌の上にひろがる。木が揺れて、ばらばらと雨雫を頭から浴びる。——雨雲のはしる下には田植が忙しい。こんなことを思ひ出させるこの木にも、雨がしとくと降つてゐる。

地面に置いてある鉢の風知草もびつしより濡れて、周縁に垂れ下つた一枚々々の葉先から絶えず雫を落してゐる。薔薇の葉には銀色の玉が幾つもころがつてゐる。赤い薔薇が斑に緑の苞に包まれて、勢よく伸びてゐる。秋海棠の芽にも雫が光つてゐる。莖を少しもたげ、葉を一枚開かうとしてゐるところだ。

雨はしとくと降つてゐる。いつ止むとも知れないやうに降つてゐる。僕は縁側に立つて、足が少し冷たくなつてくるのを感じながら、じつと庭の面を眺めてゐた。

(花のある隨筆)

伊藤左千夫
 名は幸次郎
 歌人
 千葉縣の人
 大正二年歿
 年五十
 千本松原
 靜岡縣沼津市
 の海濱に在る
 沼津
 現沼津市
 東海道
 江戸から京都
 に至る街道
 狩野川
 靜岡縣田方郡
 に發源し沼津
 市を流れて駿
 河灣に注ぐ
 香貫山
 沼津市の東部
 に在る
 子持川
 狩野川の支流
 沼津の街と千
 本松原との間
 を流れる

六 千本松原

伊藤 左千夫

沼津の町の細い横町を二曲り三曲りして昔の東海道へ出た。左へ振向いて見ると、町の往來が突抜けてゐる。狩野川の端まで道が通じてゐるらしい。その向うを塞ぐやうに枯芝の香貫山が立つてゐる。山のない國に生まれて、山のない東京に住んでゐる予は、こんな所がわけもなく面白い。右へ少し行つて町を出てしまふと、小さな川がある。子持川とかいふさうだ。こゝに又砂利汽車の踏切がある。予がその踏切と土橋とを渡ると、左側の茅葺屋根の家から、筒袖を著て下駄をはいた五十位の肥つた男が出てきて、今馬車が出ますが、如何ですか」といふ。馬車など一向そこらに見

えないが、予はそんなことを心に留める必要もない。「いや私は千本松原へ遊びにきたのだが、首塚といふのはどの邊か」と問うた。するとその男は丁寧に腰をかゞめて、「さうでございますか、お首さんですか。それはすぐそこでございます。この川の縁を真直に松原へ這入ればちき分かります」というた。その音聲から態度まで、いかにも善良な人らしく思はれた。かりそめの事ながら、予は一種の愉快を感じた。人間は美に觸れても愉快を感じ、善に觸れても愉快を感じるものだなと思つた。教はつた通り、川に沿つて



千本松原

東の方向に歩を移した。左手には人家がまばらにある。右

手は一面に麥生の田である。千本松原はすぐ眼の前に横たはつてゐる。

幾萬本あるか分からぬ程の松が勢揃ひをして雲を突いてゐる。空が曇つて雨模様になつたので、松の梢が雲に届いてゐるやうだ。

川の西側に茅屋が二軒あつて、その裏手の藪で鶯が鳴いてゐる。麥田の方には白い手拭で頬冠りした男が二人、さくを切つてゐる。その川といふ



千本松原と富士

のも根岸の川位で細いものだが、山に近い國だけあつて、水が

根岸の川
根岸川
根岸(東京市
下谷區の内)
附近を流れて
隅田川に入る

さくを切つた
煙をたかす

天正八年

二二四〇年
正親町天皇の
御代

武田勝頼

信玄の子

戰國時代の武
將

甲斐國(山梨
縣)甲府城主

天正十年歿
年三十七

北條氏政

氏康の子
戰國時代の武
將

相模國(神奈
川縣)小田原
城主

天正十八年歿
年五十三

天正十八年歿
年五十三

清くて流れが早い。人參や大根の切れ端、菜葉や葱の葉などが物に引つかゝつてゐるけれども、少しも汚くは見えない。瀬戸物の缺けや貝殻などが水の中に白く光つてきれいだ。

間もなく千本松原で、林

中の砂原に杉丸太の小さな鳥居がある。八尺許りの石碑が立つてゐて、表に

首級冢碑と記してある。

明治三十三年に多くの鬮

體が露出したのを、同三十五年五月に土地の人が相謀つて石

を立て、これを弔うたと書いてある。天正八年武田勝頼が北

條氏政とこの地で争うた時に、首級をこゝに埋めたのであら



首級冢碑

うとのことである。それがかく閑雅清淨の地に祭られて、土地の人々には「お首様」お首様といはれてゐる。古來戦場の露と消えた人間は數限りなくあるが、三百年はおろか百年の後に、その跡を認め得らるゝものがいくらあるであらうか。予はいろ／＼な感慨にふけりながら、やがて海近くへ出た。

外から見たよりも、中へ這入つてみると一層立派な松である。三かゝへもある古木が、脊を競うて十丈以上に聳え立つてゐる。その壯快な趣は何とも形容することが出来ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽にありがちな不自然なのは厭味なものであるが、風が根元を吹きさらつて自然に根上りとなつたのは頗る趣がある。巨大な幹や、繁り繁つた枝や葉をしつかりと支へてゐる根張りの力が、その形に顯れてゐる。

實に見る眼も氣持がよい。

松原を出ると、芝原に空家らしい家が一軒あつて、その脇に朽敗船が二艘引き上げてある。家といふは、吹き拂ひで戸がないから、空家だと思つて行つてみると、男が二人、足を投げだして繩をなつてゐる。その前を通つて波打際へ降りてみる。非常に砂利の多い所は、人工的に積みかさねた如く壇を成してゐる。海はごく穏で、伊豆の眞城山・大瀬の崎など手にとるやうに見える。西の方、久能・三保など薄黒い雲のやうである。のたり／＼と波がよせる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中にあるのが殊に美しく見えるので、波の引いたところへつけ入つて取らうとする。波が

伊豆
現静岡縣の内
眞城山・大瀬の
崎
共に静岡縣田
方郡に在る
久能
久能山
同縣安倍郡に
在る
三保
三保松原
同郡に在る

水鳥のかつくとろれは
君か代は
水鳥にも道はありけり
鈴木重胤

鈴川
静岡縣富士郡
元吉原村鈴川

六代松
千本松原に在
る
平維盛の子六
代の遺跡

すぐ寄せて来る。波が引く。取らうとする。また波がすぐ寄せ返す。たうとう片足の足袋を濡しただけで、小石は取れなかつた。波が石を惜しんでゐるやうに感じられた。三十三間許りの沖を、鵜が三羽、かづいては泳ぎ、かづいては泳ぎ、東の方へ泳いでゆく。鈴川の邊から小舟が二艘、ゆたくと櫓を押しして来る。のたり／＼の波とよく調和してゐる。煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりしてきた。予は六代松を見ようとの心組であるから、この邊から上つたがよからうと氣づいて、松原へ向かつて上つてゆく。先刻下りた所と同じやうに、小屋が一軒、舟が二艘並んでゐる。松原を通り抜けて里へ出る道がついてゐる。その路傍の松の中に荷車を置いて、づんぐりとした親爺が、砂利を磯から荷車

へ運んでゐる。藁を組んで作った畚で擔いでゐるのである。そこら一面砂利であるのに、なぜ遠くから運ぶのかと思つたが、粒の揃うた小砂利を集めてゐるらしい。予はその親爺が再び車へ運んでくるのを待つて、六代松の所在を尋ねた。親爺は先づ鉢巻の手拭を外し、姿を正して答へた。
「はい、六代松でございますか。それはすぐそこでございませう。私はこの村の者ではありませんが、人様に尋ねられてもと思ひまして聞いておきました、六代松と申しても松はありません。あそこに墓場があります。向うの垣根とその墓場との間を右へ曲ると、向うに小さい森が見えます。その森の中に標の石が立つて居ります。はい。」
なる程、六代松といふ松はない。常磐木の小さなこんもり

從者ども
六代の從者齋
藤五・齋藤六
助けた人
文覺上人
眞言宗の僧

北條
北條時政
鎌倉幕府第一
代の執權
建保三年（一
八七五）歿
年七十八

した森の中に、さゝやかな石が立つてゐる。非常に大きな松があつたこのことだが、今はその株跡すら判からぬ。多くの首を一まとめにして埋めた事跡とは反對に、危き命を助かつた人の喜、その從者どもの喜、助けた人は勿論、守護の任に當つた北條主従に至るまで、嬉し涙にくれたさまが、眼の前に見える心持がするのである。

予は、松原の中を縦に通つてゐる道を歸つて來る。女子供の松葉を搔いてゐるのが幾組もある。道理で松原は藪の中間まで透きとほるほど掃除されてゐる。

予は今一つこの松原に就いて、大いなる愉快を禁じ得ぬ事があつた。それは予がこの松原を十餘町も往復する間に、松葉搔に幾組も出逢つて、この地方の者が松原で焚きつけを求

めることが知れたにもかゝらず、篠一本、小松一本、刃物を以て切つた痕を見なかつたことである。予は斯く心づいてから餘程注意して見たが、遂に切り取つた痕も、折り取つた痕も認め得なかつた。いかにも人氣の篤實な土地であるといふことが察せられる。この立派な松原が少しも損はれず、今日に傳はつたのも、決して偶然ではない。官林のことであるから、妄りに竹木を切つてはならぬことになつてゐるには相違ないが、人氣が篤實でなくて、はどうしてそれがこんなによく行はれよう。何の辨へもない兒童に至るまで、少しもその禁を犯さぬといふのは、理窟の力ではなく、民衆の美質に由ること、疑ふ餘地もない。

始めて沼津に來て、何とはなしに平和の趣を感じた予は、今

靜浦
静岡縣駿東郡
靜浦村

それを事實として觀察し得たのである。富士の眺も美しい。靜浦の眺も美しい。千本松原も美しい。しかしながら、沼津の人氣の眼に見えない美しさにはとても及ばないであらう。このやうな考へごとに耽りながら急いで歸つて來ると、雨がぼつ／＼落ちて來た。松原を出ようとする松林の小高い所に十二三の男の兒が遊んでゐる。其處に居た犬が予を見て俄に吠えだし、予に向かつて走つて來る。男の兒は犬を頻りと叱る様子であつたが、予は犬の吠えるのには眼もくれないで歩いてゆく。犬は益々吠える。やがて男の兒は走つて來て、犬を捕へて吠えさせない。やがてもと來た子持川の脇へ出た。見渡した沼津の宿はほんのりと霞にこめられて、春雨が靜かに降つてゐるらしい。

(左千夫全集)

湯淺常山

名は元禎

儒者

備前國(岡山

縣)岡山藩士

天明元年(二

四四一)歿

年七十四

天德寺了伯

佐野房綱

慶長六年(二

二六一)歿

年四十四

佐野の城

現栃木縣安蘇

郡唐澤山に在

つた

佐々木高綱

壽永三年(一

八四四)宇治

川の戦に先陣

の功を立てた

那須與一

名は宗高

壽永四年屋島

の戦に扇を射

て名を顯した

七 天德寺了伯

湯淺常山

佐野の城主天德寺、勇將なりしが、或時琵琶法師に平家を語らせて聞きけるに、いまだ語らぬ先に、**それはたゞあはれなることを聞きたくこそあれ。其の心得せよ**といひしに、法師承り候とて、佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出でたりしに、天德寺、雨雫と涙をながして泣きたりけり。さてまた、今一曲前のごとくあはれなることを聞きたしといへば、那須與一が扇的を語る。半ばにおよびて、天德寺また落涙數行におよべり。

後日に側に仕へし者どもに、過ぎにし日の平家はいかゞ聞きつるといふに、皆面白き事に覺え候。但し一つ心得ぬ事こ

右大將
源頼朝
蒲冠者
源範頼
梶原景季
景時の子
生岐
頼朝の愛馬

そ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて、あはれなるかたす
こしも候はぬに、君には御感涙にむせばせられ候。今に不審
なる事と申しあひ候といへば、天徳寺驚きて、只今迄は各をた
のもしく思ひ候ひしが、今の一言にて力を落したるぞとよ。
先づ佐々木が事をよく心にうかべて見られ候へ。右大將、舍
弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ。生岐を高
綱に賜はるにあらざや。其の甲斐もなきて、此の馬にて宇治
川の先陣せずして人に先をこされな。必ず討死してふたゝ
び歸るまじき暇乞ひして出でける。推量の打消れならぬ事か
はとて、しばし涙をのごひつゝ、しばしありいひけるは、又
那須與一も人多き中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、
馬を海中に乗り入れて、的にむかふに至るまで、源平兩家鳴り

大邊の武勇

常山紀談
二十五卷
隨筆
元文四年(二
三九九)成

をしづめて之を見物す。もし射損じなば身方の名折れたる
べし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと思ひ定めたる志
を察して見られよ。弓箭とる道ほどあはれなるものはあら
じ。われは毎も戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り
候ゆゑ、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやり、落涙にたへ
ざりし。然るに、各はあはれになかりしとや。思ふに、各の武
邊は、唯一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきに
やと思はれ候。それにてはたのもしからずとなげきけると
ぞ。
(常山紀談)

歴々
名門
名家

室鳩巢
名は直清
徳川幕府の儒官
江戸の人
享保十九年
(二三九四)歿
年七十七
青木新兵衛
上杉景勝の舊臣
後徳川秀康に仕へた
徳川三河守秀康
家康の第二子
越前國(福井縣)福井藩主
慶長十二年
(二二六七)歿
年三十四
越前
現福井縣の内

八 青木新兵衛

室 鳩 巢

徳川三河守秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召し抱へられけり。又狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の著初せさせけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧きする事を頼みけり。さて饗膳すみ祝の杯に及びし時、伊勢、今日は愚息が鎧の著初にて候まゝ、御身の御武功の事御物語り候ひて彼に御きかせ候へ」といひしに、掃部「いや、某が身の上に御話し申すべき程の武功は覚え申さず候。されど御望も黙しがたく候まゝ、某一生の中に武者振りの見事なる士を一人見申して候、その事を話し申すべし。」

江州賤ヶ嶽の戦
天正十一年
(二二四三)羽
柴秀吉と柴田
勝家とが近江
國賤ヶ嶽(現
滋賀縣伊香郡
伊香具村に在
る山)に於て
戦つた戦
余吾の湖
現伊香郡余呉
村に在る琵琶
湖北方の小湖

「江州賤ヶ嶽の戦に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其の人申し候は、今朝よりかせぎ候へ甲ども、よき敵にあひ申さず候。御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべし」とてすゝみ



より候故、それこそなたも望む所にて候へ」とて、互に馬を乗りはなし、已に槍をあはせんとしけるに、其の人「しばし御待ち候へ、今朝より雑兵をおほく突き崩し候故、槍よごれて候まゝ、

八 青木新兵衛

緋威 緒通 (ラドン)

才料
ニイテ

緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通
緋威 緒通

槍を洗ひ候ひて御相手になり候はん」とて、余吾の湖に槍を打ちひたし二三遍洗ひつゝ、「さらば」とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはててもものあやめも見えずなりぬ。其の時、あなたより又詞をかけ、「もはや槍先も見えず候。御残り多くは候へどもこれまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候」とて、某が名をも承り候ひて、「此の後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手にはかゝり申すまじく候。もし又身方にて候はば、わりなく入魂いたし候べし。さらば」とて立別れしが、これ程見事なる武士はつひに見侍らず、いかゞなりはて候にや」と語りけり。

其の頃伊勢がもとへ心安く出入りする青木方齋といふ浪

馬の毛色

青毛 (黒馬)
栗 (赤馬)
月 (白馬)
葦 (青馬)

青毛 (黒馬)
栗 (赤馬)
月 (白馬)
葦 (青馬)

駿臺雑話
五卷
隨筆
寛延三年(二)
四一〇〇刊

士あり。其の日も来て勝手に居たりしが、此の物語をききて、勝手よりにじりいでつゝ、掃部にむかひて、「さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候青木新兵衛は、はづかしながら我等にて候。かく申すばかりにては、うきたる事におぼすべく候」とて、其の時の雙方の鎧の緋馬の毛色を一々いひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きつゝ、「さて久しくあひ候うて本望に候」とて、手前にありし杯を方齋にさし、「これをしるし」とて、腰の脇差を抜きて引きけり。

(駿臺雑話)

新井白石

名は君美
徳川幕府の儒

官

享保十年(二

三八五)歿

年六十九

伊達政宗

陸奥國(宮城

縣)仙臺城主

寛永十三年

(二二九六)歿

上杉景勝

陸奥國(福島

縣)會津城主

元和九年(二

二八三)歿

白河

現福島縣西白

河郡白河町

白石

現宮城縣刈田

郡白石町

磐城

現福島縣の内

相馬

現同縣相馬郡

九 伊達政宗

新井白石

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻め入るべき由の仰せ承りて、大坂を打立ち、夜を日に繼いで馳せ下る。白河より白石に至るまでは、皆敵の中なれば、道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城、相馬にさしかりて、國に歸らんとするに、相馬亦累代の敵國なり。恙なく通らんと叶ふべからず。然るに政宗、僅かに五十騎ばかり引具して、常陸國を経て、磐城と相馬との境に到りて、先づ相馬が許に使者を立て、此の度徳川殿、上杉を征伐し給ふに因りて、政宗、搦手より向かふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境に到り侍りぬ。餘りに道を

長門守義胤
相馬義胤
陸奥國(福島
縣)中村城主
寛永十二年歿

窮鳥懐に云々
窮鳥入懐、仁
人所憫。
(頼氏家訓)

早めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。願はくは城下に旅館點じて給はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず」と云はせたり。長門守義胤これを聞きて、あつばれ運の盡きぬる奴原かな。たゞにも伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや身方討たれん一方の大將承ると云ふ者を、いで今宵一夜討して、案内知らぬ者共を此處彼處に追ひ詰めて、一人も残さず討ち取つて、年來の仇に報い、今度の賞に預らば、やとて、やがて民家をしつらうて迎へ入れ、家子郎從等召し集めて、夜討の様をぞ議したりける。

爰に水谷三郎兵衛尉某、遙かの末座より進み出て、末座の意見、恐れ入つて候へども、既に僉議の座に列なりて候上は、心に存ずる所を申さざらんは、其の詮なし。抑、窮鳥懐に入る時は、

駒が峯
現福島縣相馬
郡駒ヶ嶺村
未の時
今の午後二時
頃

獵者もこれを殺さず」とこそ承れ。政宗ほどの大名が既に年
來の恨を棄て、君を頼みて來りしを、たばかりで闇々と討たれ
んは、勇者の本意とする所にあらず。長き弓矢の瑕瑾なり。
又我が城を去つて、彼の國の境、駒が峯に到らんこと、行程僅か
に三里。けふの日、未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到
らんとだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それ
に僅かの勢を以て此處に止ること、豈深き謀計なからざらん。
唯同じくは、我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此の
度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して勝負
を兩家の天運に任かせらるべし、候はん」と申しければ、滿
座の輩、皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料魚鹽秣糠藁に
至るまで積み置きて、夜に入り四面に篝火たかせ、兵共に夜を

めぐらせ、警衛心を盡くしてけり。

義胤が士ども、政宗が餘りに取鎮めたる體を見て、憎し、いざ
彼が振舞を試みんとて、夜更けて、馬一二匹切つて放つ。雜人
原走り散つて、以ての外に騒ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持
たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、相馬殿
の御人や候、御人や候と云ひし時、さむらふとて参りければ、物
音高う候、何事にや。政宗が雜人原、狼藉候はんには、能く鎮め
てたべとて、又内にぞ入りにける。斯くて夜明けけれども立
ちもやらす。巳の刻ばかりになりて、義胤が許に使して一禮
し、靜かに馬をうつて行く。竊に人を附けて見せたるに、彼の
國境の駒が峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く満ちゝて
出て迎へぬ。

巳の刻
今の午前十時
頃

關ヶ原の合戦
慶長五年(二
二六〇)美濃
國(岐阜縣)
關ヶ原に於て
徳川家康と石
田三成等との
間に行はれた
戦
石田
石田三成
近江國(滋賀
縣)佐和山城
主
慶長五年歿

藩翰譜
十三卷
諸侯の傳記録
元祿十五年
(二二六二)成

斯くて關ヶ原の合戦事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に世帯
を沒收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗、徳川殿に訴へ申し
けるは、相馬はたゞにも政宗が年頃の敵なり。それに、上杉、石
田等に與したるが一定に候はんには、政宗彼が爲に討たるべ
き時至つて候ひしに、君の仰せ承り馳せ下る由を聞きて、忽ち
に舊き恨を忘れ、新しき恩を施して候ひき。是、偏に彼が野心
を挾まざりし故にあらずや。且は又、累代弓矢の家、此の時に
至つて長く斷絶すべきこと、誠に不便の至なり。唯然るべく
は、彼が本領安堵の事、御免を蒙らばやと折に觸れて度々歎き
奉りしかば、其の事となく、年月を経て後、本領をぞ賜うたりけ
る。
(藩翰譜)

内村鑑三

宗道家
東京市の人
昭和五年歿
年七十
デンマルク
中部ヨーロッパに在る王國
ユトランド半
島の大部及び
その隣接島嶼
から成る

一〇 興國の樞

内村 鑑三

デンマルクは歐洲北部の一小邦であります。其の面積は
我が九州にも及ばず、其の人口も、我が國人口の何十分の一で、
實に取るに足りないやうな小國であります。併し此の國は、
富の程度の高いことに於て、また生活の平和幸福なことに於
て、世界の羨望する所でありまして、かゝる小國がよく今日を
致しました原因と経過につきましては、そこに學ぶべき多く
が見出されるのであります。

デンマルクは、もとゞ決して富饒の地ではありません。
國に一の鑛山があるのではなく、一の大港灣の、萬國の船舶を惹
くに足るものがあるのでもありません。デンマルクの富は

トルワルセン
1768—1844
彫刻家

アンデルセン
1805—1875
詩人

キルケゴール
1813—1855
哲學者

今
明治四十四年



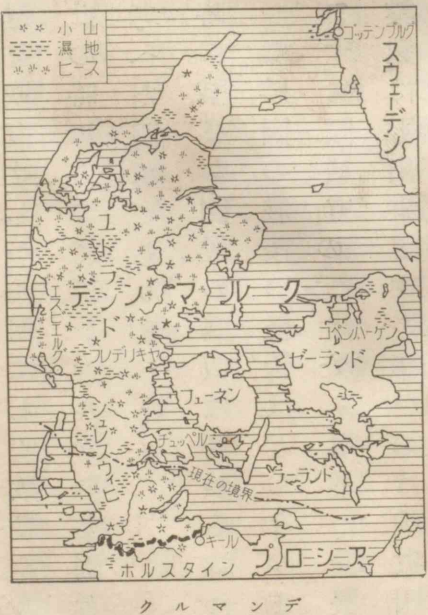
三 鑑 村 内

主として其の土地にあるのであります。其の牧場と、其の家畜と、其の樅と白樺の森林と、其の沿海の漁業とにあるのであります。殊に其の誇とする所は乳産であります、牛酪と乾酪であります。トルワルセンを出して世界の彫刻術に一新紀元を劃し、アンデルセンを出して近世お伽噺の元祖たらしめ、キルケゴールを出して眞摯な信仰を世界に宣揚せしめたデンマルクは、實に柔和な牝牛の産を以て立つ、小さくて靜かな國であります。然るに今を去る四十年前のデンマルクは、最も哀れな國で

ヂュンベル
シユレスウイ
ヒの東海岸に
在る都邑

シユレスウイ
ユトランド半
島の南部に在
る
今は北部はデ
ンマルク領、
南部はホルス
タインと共に
ドイツ聯邦共
和國のプロシ
ヤに所屬
ホルスタイン
シユレスウイ
ヒの南に在る

ありました。西曆千八百六十四年に普墺二國の壓迫する所となり、其の要求を拒んだ結果、遂に開戦の不幸を見、デンマルク人は善く戦ひましたが、併し弱を以て強に勝つ能はず、ヂュンベルの一戦に敗れて、再び起つ能はざるに至りました。而して其の賠償として普墺の二國に南部最良の二州シユレスウイヒとホルスタインを割譲しなくてはなりません。これが爲にデンマルクは窮困の極に達しました。固より多くもない領土の、しかも其



の最良の部分を持ち去られたのであります。國は小さく、民は尠く、しかも残つた土地には荒漠が多いと云ふ状態でありました。如何にして國運を恢復せんか、如何にして敗戦の大損害を償はんか、これが此の時に方つて、デンマルクの愛國者等が其の腦漿を絞つて考へた問題でありました。

國民の精力は斯かる時に試され、國民の眞價は斯かる時に判明するのであります。戰勝國の戦後の經營は、どんなつまらない政治家にも出來ます。國威宣揚に伴なふ事業の發展は、どんなつまらない實業家にも出來ます。難いのは戰敗國の戦後の經營であります。國運衰退の時に於ける事業の發展であります。國の興ると亡びるとは此の時に定まるのであります。どんな國にも時には暗黒が臨みます。其の時こ

れに打勝つことの出来る民が、永久に榮える民であります。恰も、疾病の襲ふ所となつて始めて人の健康がわかると同然であります。

デンマルク人は、戦に敗れて家に還つて來ました。還り來れば、國は荒れ、財は盡き、見る物として悲憤の種ならざるはない有様でありました。

然るに茲に一人の工兵士官がありました。彼は名をダलगラスといひ、フランス系のデンマルク人でありました。彼の祖先は有名なユグノー黨の一人でありました。彼等は千六百八十五年信仰自由の故を以てフランスを逐はれ、或は英國に、或は和蘭に、或はプロシヤに、或はデンマルクに逃れつゝ、到る處に眞摯な信仰と自由と勤勉とを運び、多くの有益な事業

ダलगラス
1830年—1900

ユグノー
十六世紀に
於けるフラン
スの新教徒

を起したのであります。而して十九世紀の末に於て彼等は猶其の祖先の精神を失つてはゐなかつたのであります。



地荒のドンラトユ

ダルガス、齡は今三十六歳、工兵士官として戦争に臨み、橋を架し、道路を拓き、溝を掘る際、細かに故國の地味地質を研究しました。而して戦争が未だ終らない中に、彼は既に其の胸中に故國恢復の策を立てました。即ちデンマーク國の歐洲大陸に連なる部分で、其の領土の大部分を占めてゐるユトランドの荒漠を化して、これを沃饒の地にしようといふ大計畫であります。彼の同僚が絶望に壓せられて其の故國に歸

ユトランド
バルチック海
と北海との間
に在る半島

つて來た時に、ダルガスは、其の面に微笑を湛へ、其の首に希望の春を戴いてゐました。彼は其の生存中にユトランドの曠野を化して薔薇の花咲く所とすることが出來ると信じました。彼は鋤と鍬とを以て、残る領土の荒漠と闘ひ、これを田園と化して敵に奪はれたものを補はうとしました。併しダルガスは單なる夢想家ではありませんでした。工兵士官である彼は、土木學者であつたと同時に、又地質學者であり、植物學者でありました。詩人であつたと同時に、又實業家でありました。彼は理想を實現するの術を知つて居りました。

ユトランドはデンマルクの半ば以上を占めて居ります。而して、其の三分の一以上が不毛の地であつたのであります。面積一萬五千平方哩のデンマルクにとりましては、三千平方

哩の曠野は過大の廢物であります。これを化して良田沃野となして、外に失つた所のものを内に於て償はうとするのが、ダルガスの夢であつたのであります。而して、此の夢を實現するに方つて、ダルガスの執るべき武器は只二つでありました。其の第一は水であり、其の第二は樹でありました。荒地に水を漑ぐを得、これに樹を植ゑて植林の實を擧げることが出来れば、それで望は成るのであります。事は至つて簡單であります、決して容易ではありません。ユトランドの荒地は、今から八百年前には、其處に繁茂した良い林がありました。降つて今から二百年前までも、まだ處々に櫛の林を見ることが出来ました。然るに、人は土地から取るにのみ急で、これに酬ゆるに緩でありました。故に、地は時を追うて益、

ヒース 石南科の灌木
レバノンの榮
荒野と云ふは
ひなき地とは
たのしみ沙漠
はよるこびて
番紅の花の如
くに咲きかゝ
やかん。盛に
咲きかゞやき
て喜び且よろ
こび且うたひ
レバノンの榮
を得カルメル
およびシヤロ
ンの美しきを
得ん。
(舊約聖書)
レバノン
レバノン山
西南アジアの
パレスティン
とシリヤとの
國界に在る

瘠せ衰へ、終に四十年前の憐むべき状態に立至つたのであります。併し人間の貪慾を以てするも、地は竟に永久に殺すことの出来るものではありません。天然が示す或適當な方法を以てしますれば、此の最惡の状態にある土地をも元始の沃饒に還すことが出来るのであります。

それには、先づ溝を穿つて水を注ぎ、ヒースと稱する荒野の植物を驅逐し、これに代へるに馬鈴薯、或は牧草を以てするところが必要でありました。此の事は左程困難ではありませんでした。併し難中の難事は、荒地に樹を植ゑることでありました。此の事について、ダルガスは非常の苦心を以て研究しました。凡そ植物界中にユトランドの荒地に適し、其處に成育して、レバノンの榮を現す樹は有りや無しやと彼は研究に

那威産の樅
ノルウェー樅
赤樅ともいふ
松杉科はりも
み属の喬木

アルプス産の小
樅
モンタナ松
松杉科まつ属
の小喬木又は
灌木

研究を重ねました。而して彼の心に思ひ當りましたのは、那威産の樅でありました。これはユトランドの荒地に成育すべき樹であることは分かりました。併しながら實際これを試験して見ますと思ふ通りには行きません。樅は生えは生えませんが、數年ならずして枯れて了ひます。ユトランドの荒地は、今や此の強硬な樹木をさへ養ふに足る養分を存してゐませんでした。

併しダルガスの熱心は、これが爲に挫けませんでした。彼は、天然はまた彼に此の難問題をも解決して呉れると確信して、更に研究を續けました。かくて彼の頭腦にふと浮かび出ましたのは、アルプス産の小樅でありました。これを移植したらばどうかといふことでありました。そこでこれを取り

來つて那威産の樅の間に植ゑました。奇なる哉、兩種の樅は相竝んで生長し、年を経ても枯れなかつたのであります。茲に年來の大問題が解け、ユトランドの荒野に再び緑の野を見ることが出來ました。

併し、問題は未だ完全には解けませんでした。緑の野は出來ましたが、緑の林は出來ませんでした。ユトランドの荒地から建築用の木材をも伐り得ようといふダルガスの野心的欲望は、事實となつて現れませんでした。樅は或程度まで生長して、それで生長を止めました。其の枯死はアルプス産の小樅の併植を以て防ぎ得ましたけれども、其の永久の生長はこれによつて遂げられませんでした。「ダルガスよ、汝の預言せし材木を興へよ」と言つて、デンマルクの農夫等は彼に迫り

ました。彼の長男をフレデリックダルガスといひました。彼は父の質を受けて善い植物學者でありました。彼は、樅の生長について大なる發見をしました。

若きダルガスはいひました。大樅が或程度以上に生長しないのは、小樅を何時までも大樅



林植の樅のドンラトユ

の側に生やして置くからである。若し或時期に達して小樅を伐り拂つてしまふならば、大樅は獨り土地を占領して其の生長を續けるであらうと。若きダルガスの此の言を實際に

試して見ました所が、實に其の通りでありました。小樅は或程度まで大樅の生長を促す能力を持つて居りますが、併しその程度に達すれば、却つてこれを妨げるものであるといふ奇態な植物學上の新事實が、ダルガス父子によつて發見せられたのであります。しかも此の發見は、デンマルク國の開發にとつては實に絶大な發見でありました。これによつて、ユトランドの荒地挽回の難問題は解決され、各地に鬱蒼たる樅の林を見るに至つたのであります。

併し、植林の効果は、單に木材の收穫に止りません。第一に其の善い感化を蒙つたのはユトランドの氣候でありました。樹木の無い土地は、熱し易く冷め易くあります。故にダルガスの植林以前に於ては、ユトランドの夏は、晝は非常に暑く、し

かも夜は時に霜を見る有様でありました。随つて、當時ユトランドの農夫が收穫成功の希望を以て栽培し得た作物は、馬鈴薯、黒麥、其の他少數のものに過ぎませんでした。然るに植林成功後は、夏季の降霜は全く止みました。そして、小麥なり、砂糖大根なり、北歐産の穀類なり、野菜なり、そこで成熟しないものはなймаてになりました。ユトランドは大樅の繁茂の結果、良い田園と化しました。木材を與へられた上に、善い氣候を與へられました。

北海
 ヨーロッパ大
 陸・大ブリテ
 ン島・スカン
 デナヴィヤ半
 島に圍まれた
 大西洋の支海

併し、植林の善い感化はこれに止りませんでした。樹木の繁茂は、海岸から吹き送られる砂塵の荒廢を止めました。北海沿岸特有の砂丘は、海岸近くに喰ひ止められました。北海に濱する國にとつて敵國の艦隊よりも恐るべき砂丘は、戦闘

艦ならずして、緑の樅の林を以て見事に撃退されたのであります。

霜は消え、砂は去り、其の上に洪水の害も除かれました。これは何處の國に於ても、植林の結果として直ちに現れるものであります。勿論、海拔六百尺を以て最高點とするユトランドに於ては、山國に於ける如く洪水の害を見ることはありません。併し、其の比較的、少い此の害すら、ダルガスの事業によつて全く除かれたのであります。

斯くの如くにして、ユトランドの全州は一變しました。廢れた市邑は再び起りました。新に町村は設けられました。地價は非常に騰貴して、或所では四十年前の百五十倍に達しました。道路と鐵道とは縦横に築かれました。我が四國全

島に更に一千平方哩を加へたユトランドは復活しました。戦争によつて失つたシュレスウイヒとホルスタインとは、今日已に償はれて餘りあるとのことでありませう。國を削られた彼等は、新に良き國を得たのであります。併し、木材よりも野菜よりも、穀類よりも、畜類よりも、更に貴いものは國民の精神であります。デンマルク人の精神は、ダルガスの植林成功の結果として茲に一變し、殆ど絶望に陥つてゐた彼等は、茲に絶大な希望と勇氣とを以て立上るに至つたのであります。斯くて信仰から來る熱誠と忍耐と、加ふるに、大樅小樅の不思議な能力によつて、彼等の故國は更生したのであります。

(内村鑑三全集)

一一 日本海海戦

天祐と神助に由り、我が聯合艦隊は五月二十七八日、敵の第二、第三聯合艦隊と日本海に戦ひて、遂に殆ど之を撃滅するこ

とを得たり。

初め敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基づき、當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め、朝鮮海峽に全力を集中して、徐ろに敵の北上を待ちしが、敵は一時安南沿岸に寄泊したるの後、漸次北航し來りしを以て、其の我が近海に到達すべき數日前より、豫定の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し、各戦列部隊は一切の戦備を整へ、直ちに出勤し得る姿勢を保持して、各、其の根據地に泊在せり。

我が聯合艦隊
第一・第二・第三艦隊及び附屬特務艦隊から成つてゐた
五月二十七八日
明治三十八年五月二十七八日
敵の第二・第三聯合艦隊
ロシアの太平洋第二・第三聯合艦隊
朝鮮海峽
對馬・朝鮮半島間の海峽
安南沿岸
佛領印度支那東海岸のホンコーへ灣・カムラン灣

東水道
對馬・壹岐間
の對馬海峡

宇久島
五島列島最北
の島
長崎縣北松浦
郡に所屬
第五・第六戰隊
共に第三艦隊
所屬
第三戰隊
第一艦隊所屬
壹岐・對馬
玄海灘の島
長崎縣に所屬
沖の島
對馬の東方に
在る小島
福岡縣宗像郡
に所屬

果然二十七日午前五時に至り、南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は、敵艦隊二〇三地點に見ゆ。敵は東水道に向かふもの如しと警報し、全軍踴躍、直ちに發動し、各部隊は豫定の部署に準じて對敵行動を開始せり。

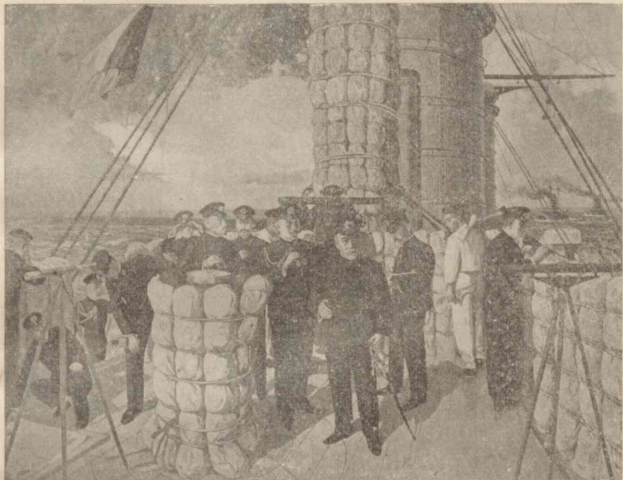
午前七時哨艦和泉も亦敵艦隊を發見して、敵既に宇久島の北西二十五哩の地點に達し、北東に航進するを報じ、第五第六戰隊、次いで第三戰隊も、午前十時十一時の交、壹岐對馬の間に於て敵と觸接し、爾後沖の島附近に至るまで、此等の諸隊は、時に敵の砲撃を受けしも、終始よく之と觸接を保持し、詳に時々刻々の敵情を電報せしかば此の日海上濛氣深く、展望五哩以外に及ばざりしも、數十哩を隔つる敵影恰も眼中に映ずるが如く、未だ敵を見ざる前、既に敵の戰列部隊は其の第二第三艦

二〇三地點
北緯三三度一分
東經一六度一分

第一戰隊
第一艦隊所屬
第二・第四戰隊
共に第二艦隊
所屬
各驅逐隊
第一艦隊所屬
の第一・第二・
第三驅逐隊及
び第二艦隊所
屬の第四・第
五驅逐隊

隊の全力にして、特務艦船約七隻を伴ふこと、敵の陣形は二列縦陣にして、其の主力は右翼列の先頭に占位し、特務艦船は後尾に續航せること、又敵の速力は約十二哩にして、なほ北東に航進せること等を知り、本職は之に依り、我が主力を以て午後二時頃沖の島附近に敵を迎へ、先づ其の左翼列の先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。

第一第二第四戰隊及び各驅逐隊は正午頃既に沖の島の北方約十哩に達し、敵の左側に出でんが爲、更に西方に針路を執りしが、午後一時三十分頃第三戰隊及び第五第六戰隊等も、敵と觸接を保ちつゝ、相前後して來り合し、同時四十五分に至り、正に我が左舷南方約數哩に始めて敵影を發見せり。
敵は豫期の如く、其の右翼列の先頭にボロヂノ型戰艦四隻



僚艦及び官長令司郷東の橋艦並三艦旗

特務艦船等、數浬に互りて連綿續航するを仄かに認むるを得

の主力戦隊を置き、オスラービヤ・シソイウ・エリーキーナワリ
 ンより成る一隊左翼列の先
 頭に占位し、ニコライ一世外
 海防艦三隻より成る一隊之
 に次ぎ、ジエムチウグイズム
 ルードの二艦は兩列の間に
 介在して前方を警戒せるも
 のの如く、尙其の後方濛氣の
 裡には、オレーグ・アウローラ
 以下二三等巡洋艦の一隊ド、
 ンスコイ・モノマーフ、其の他

たり。

是に於て戦闘開始を令し、一時五十五分全軍に對し、皇國の
 興廢此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよとの信號を掲
 揚せり。而して、第一戦隊は少時南西に向首し、敵と反航通過
 すると見せしが、午後二時五分急に東に折れ、其の正面を變じ
 て斜に敵の先頭を壓迫し、第二戦隊も續航して其の後に連な
 り、第三第四戦隊及び第五第六戦隊は、豫定戦策に準じ何れも
 南下して敵の後尾を衝けり。これを當日戦闘開始の際に於
 ける彼我の對勢とす。

敵の先頭部隊は第一戦隊の壓迫を受けて稍其の右舷に轉
 舵し、午後二時八分彼より發砲を開始せしが、我は暫く之に耐
 へて、射距離六千米に入るに及び、猛烈に敵の兩先頭艦に砲火

を集注せり。敵は之が爲益、東南に擊壓せらるるもの如く、其の左右兩列共に漸次東方に變針し、自然に不規則なる單縱陣を形成して我と並航の姿勢を執り、其の左翼列の先頭艦たりしオスラービヤの如きは、須臾にして擊破せられ、大火災を起して戰列を脱せり。是の時に當り、第二戰隊も既に悉く第一戰隊の後方に列し、我が全線の掩護砲火は、射距離の短縮とともに益、顯著なる効果を呈し、敵の旗艦スウォーローフ、二番艦アレクサンドル三世も大火災に罹りて戰列を離れ、陣形愈亂れ、後續の諸艦また火災に罹れるもの多く、其の騰煙は西風に靡きて忽ち海上一面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包み、第一戰隊の如きは爲に一時射撃を中止せるの状況なりき。是、午後二時四十五分前後に於ける彼我主力の戦況にして、勝敗は

既に此の間に決せり。

我が主隊は斯くの如く敵を南方に擊壓し、煙霧の中、敵影を發見する毎に、緩徐に之を砲撃しつゝ、午後三時の比には既に敵の前路に出でて約南東に向針しつゝありしが、敵は俄に北方に向首し、我が後尾を廻りて北走せんとするが如きを以て、我は急に反轉して其の前路を扼し、再び敵を南方に擊壓し、之を猛射したれば、敵の諸艦は多大の損害を受けつゝ、混亂に陥れり。唯此の間に壯烈なる事蹟として特記すべきは、千早及び第五第四の兩驅逐隊が、敵の敗



敵主力艦隊の滅壞

千早
通報艦
第二戰隊所屬

艦スウォーロフに對し、勇敢なる水雷攻撃を執行したることなり。

かくて我は、洋上に離散彷徨せる敵の殘艦を搜索して縦横に之が撃沈につとめ、更に第三第四第五第六戰隊は、豫定戰策に準じて敵の巡洋艦及び特務部隊を迫撃しつゝ、之を撃破せるため、敵は全軍潰亂滅裂の悲境に陥りたり。此の時夕陽既に春^{ハル}き、我が驅逐隊艇隊は東南北の三面より漸次敵に逼り、既に襲撃準備の姿勢を執れるを以て、第一戰隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没と共に東方に變針し、同時に本職は、龍田をして、全軍北航して、明朝鬱陵島に集合すべし」と電令せしめ、茲に當日の晝戰を終結せり。

此の日、朝來南西の強風浪を上ぐることに高く、夕刻に至りて

艇隊
水雷艇隊
第一艇隊所屬
の第十四艇隊
第二艇隊所屬
の第九・第十
九艇隊及び第
三艇隊所屬の
第一・第十・
第十一・第十
五・第二十艇
龍田
通報艦
第一戰隊所屬
鬱陵島
朝鮮慶尙北道
の東北海上に
在る

風稍和らぎしも、浪なほ靜まらず。洋中の水雷攻撃は不利尠からざる狀況なりしも、各驅逐隊及び艇隊は、此の千載一遇の時機を失せんことを恐れ、皆風濤を冒して日没前に來り合し、各、先を争うて敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至るまで、連續して激烈なる肉薄襲撃を執行したり。敵は、日没より探照砲火を以て極力防戦せしも、遂に我が攻撃に耐へず、僚艦相失して四分五裂の狀態となり、各、血路を覓めて任意に運動せしかば、我が襲撃隊の追躡と共に、茲に一場の大混戦を現出し、少くも敵艦三隻は、此の間我が水雷に罹りて全く其の戦闘、航海力を失ひたり。

後日捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、我が艦艇連續肉薄し來るを以て、其の應接に遑な

く、且其の距離あまりに近きがために、備砲俯角の度を過ぎて照準する能はざりしといふ。

二十八日黎明、前日來の濛氣拭ふが如く、鬱陵島集合の途上にありし第五戦隊は、早くも東方に當り敵艦の煤煙數條あるを警報せり。是問はずして殘敵の主力たるや明らかなり。是に於て、第一第二戦隊は敵の前路を扼し、第六第四戦隊は第五戦隊に合して敵の後方を抑へ、午前十時三十分の頃、竹島の南西約十八哩の地點に於て敵を包圍せり。固より敗餘の敵艦、既に多大の損傷を負へるのみならず、我が優勢に抵抗し得べきにあらざれば、第一第二戦隊が先づ砲火を開くや、須臾にして白旗を掲げ、敵艦隊司令官ネボガトフ少將は其の部下と共に降意を表し、本職は特に將校以上に帶劍を許して之を受

竹島
鬱陵島の東方
に在る小島

けたり。

驅逐艦漣及び陽炎は、午後三時三十分の頃鬱陵島の南西約四十哩に於て敵の驅逐艦二隻を發見し、極力之を北西に追蹕して戦鬪を開始せしに、敵の後續驅逐艦は白旗を掲げて降意を表せり。漣は直ちに之を捕獲せしに、此の驅逐艦はベドウイにして、敵艦隊司令官ロジエストウエンスキー中將及び其の幕僚の移乗し居るを知り、其の乗員と共に之を捕虜とせり。聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たりし際、南方前日の戦場に於ても亦相應なる殘獲ありたり。此の日早朝、戰場掃除の任務を持って出發したる特務艦は、前夜の水雷攻撃に傷つき、將に沈没せんとしつゝ、ある敵艦を發見し、之が捕獲の手續を了して其の乗員を救助收容せり。其の

漣
第三驅逐隊所
屬
陽炎
第五驅逐隊所
屬

砲艦・特務艦
第二・第三艦
隊所屬

他麾下砲艦・特務艦等にて戦後戰場附近の沿岸を搜索して救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員尠からず。戦利艦五隻の捕虜と合して其の數殆ど六千に達す。

以上は五月二十七日午後より翌二十八日午後に互れる海戦の経過にして、其の後當隊の一部は尙遠く南方に敵を搜索せしも、遂に又其の隻影を見ず。日本海を通過せんとせし敵艦隊は約三十八隻にして、我が撃滅或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦・驅逐艦及び特務艦各、數隻に過ぎず。而して此の二日間の戦鬪に於て、我が艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして、其の他多少の損害を被りたるものもあるも、一として今後の役務に支障あるものなし。

此の對戦に於ける敵の兵力、我と大差あるにあらず、敵の將

卒も亦其の祖國の爲に極力奮闘したるを認む。しかも我が聯合艦隊がよく勝を制して前記の如き奇績を收め得たるものは、一に

天皇陛下御稜威の致す所にして、固より人爲の能くすべきにあらず。特に我が軍の損失・死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に由るものと信仰するの外なく、曩に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も、皆此の成果を見るに及んで、唯感激の極言ふ所を知らざるものの如し。

(東郷聯合艦隊司令長官戰鬪詳報)

安倍能成

哲學者

京城帝國大學

教授

松山市の人

明治十六年生

東郷元帥

東郷平八郎

元帥海軍大將

侯爵

鹿兒島市の人

昭和九年歿

年八十八

乃木大將

乃木希典

陸軍大將

伯爵

山口縣の人

大正元年歿

年六十四

黃海の海戰

明治三十七年

八月十日

旅順

關東州渤海灣

に臨む要塞地

一二 東郷元帥と乃木大將

安倍能成

東郷元帥と乃木大將とは、共に明治時代に於ける國民的英雄であつた。日清日露の兩戰役は、我が國運を賭した戰であつたが、この二將は、兩戰役に重要な任務を果し、殊に日露戰役に於ては、東郷元帥は黃海及び日本海の海戰に大勝を博し、乃木大將は旅順要塞の攻撃といふ至難な任務に堪へて、遂にその開城を見るに至つた。若し日本海、海戰が失敗に終るか、又失敗に終らないまでも、あれ程の成果を収め得なかつたならば、又若し旅順の要塞が難攻不落のまま、あの上いつまでも我が兵力を割かせてゐたならば、日露戰役の成行が、随つて我が國の運命が、果してどうなつてゐたであらうかを考へる

薩摩藩
薩摩國(鹿兒島縣)鹿兒島藩

弘化四年

二五〇七年

孝明天皇の御代

長府藩

長門國(山口縣)長府藩

嘉永二年

二五〇九年

孝明天皇の御代

ジョージ五世

1863—1936

東伏見宮依仁親王殿下

元帥海軍大將

大正十一年薨

御年五十六

同妃殿下

御名は周子

明治九年御誕生

時、この戰役に於ける二將の責任が如何に重大であつたか想像に餘るものがある。

東郷元帥は薩摩藩士で、弘化四年に生まれ、乃木大將は長府藩士で、嘉永二年に生まれてゐるから、元帥が二歳の年長である。兩將は戰陣の上でも因縁が深く、日清戰役には、乃木少將は第一旅團長として第二軍の先鋒となり、浪速艦長東郷大佐がその上陸を掩護した。日露戰役には、旅順の要塞に對し、東郷元帥は海から、乃木大將は陸から、共同して攻圍戰を行つた。又明治四十四年、英國皇帝ジョージ五世の戴冠式には、二將共、御名代東伏見宮依仁親王、同妃、兩殿下の隨員として參列し、歐米諸國民に世界的名將としての印象を遺してゐる。これより先、明治四十年、乃木大將は明治天皇の御聖慮により學習院

12+21+4
x A-2
2x+4+8

東宮殿下
今上天皇陛下

長に任ぜられ、同院の教育に一大刷新を加へ、東郷元帥は大正三年、東宮御學問所總裁を拜命し、學習院の業を卒へ給ひし東宮殿下御教導の大任を拜し奉つた。かくて、乃木大將は六十



東郷元帥

四歳を以て大正元年に、東郷元帥は八十八歳を以て昭和九年に薨去した。

兩將は文字通り至誠の人であつた。至誠一貫といふことは、教訓の言葉として誰も口にする所であるが、これを實行し實現することは中々むつかしい。殊に、それを興奮した一時、一月、一年だけでなく、一生に互つて實行し抜くといふことは、難中の難事である。

明治十年の役
西南役



乃木大將

兩將はその型こそ違へ、この至難事を見事に成し遂げた稀有な人々である。この點に於て、兩將の生涯には、崇高以上に神聖な感じをさへ與へるものがある。

乃木大將は、ある人が武士道の本領を尋ねたのに對して、「唯實行だ」と答へたさうである。又、明治十年の役に聯隊旗を奪はれた責任を感じて、常に死所を見出さうとして、事に當る毎に、明日ありと思はぬ、全心全力を傾け、旅順攻圍の時の如き、六十に近い身を以て、食物も生活も兵士とこれを同じくし、寸毫も自己を勞る所がなかつたといふ。これは少年

時からの鍛錬にもよるであらうが、何よりも一貫の至誠によるものでなければならぬ。しかも、さういふ例を大將傳から拾はうとすれば、その餘りに多きに驚く外はないであらう。東郷元帥が東宮御學問所總裁の大任を負うたのは、大正三年四月一日から、同十年三月一日に至るまで前後七年。元帥が六十八歳から七十五歳までであるが、その間、酒と煙草は固より、狩獵や旅行までも廢して、専心御奉公申し上げたと聞いては、誠ある人の爲す所が如何に地味な、如何に徹底したものであるかに感歎しないものはないであらう。

日露戰役に於て、敵の砲火を冒して旅順の堅壘を陥れる爲には、將卒の命を水に代へ、敢へてこれを燒石に注ぐといふやうな慘事をも決行しなくてはならなかつた。本來多感の人

皇師百萬征強虜
野戰攻城死作山
愧我何顏看父老
凱歌今日幾人還

宇品
廣島市宇品町
廣島市の南端
廣島港に臨む

であり、情の人であつた乃木大將にとつて、それが如何に悲痛な決意に出でたものであつたかは疑の餘地がない。大將が旅順開城の功を思はずして、只管その爲に命を落した將卒の上を悲しみ、郷國の父老に合はせる顔がないといつて自らを責めた詩は、深く國民の心を打つた。又凱旋將軍として宇品に入港する前に、義笠でも著なければ上られぬといふ一言を洩らされたさうである。大將凱旋の時、學生としてお迎へに行つた私は、群衆の歡呼に對して、絶えず右に向かひ左に向かつて答禮し、殆ど車上に落著くことの出来なかつた大將の姿を望んで、大將の心中がそのまゝ、讀まれるやうな氣がした。旅順の要塞が思ふやうに片附かなかつた時には、大將に對する非難の聲も相當に強かつた。しかるに、東郷元帥は、乃木

大將は最善を盡くしてゐる。誰がやつてもこれ以上にゆくものではない。艦隊から出来るだけ援助しようといつたさうである。又乃木大將の生涯を追懐しては「みるにつけきくにつけても唯君の眞心のみぞしのばれぞする」と詠じてゐる。「至誠の人、至誠の人を知る」といふべきである。

この兩將はまた、謙讓にして禮を重んじ、自らを責むること甚だ嚴にして人に求むること極めて寛大であつた點、衷心平和を愛し、仁慈に富み、敵に對する情誼を解した點等に於ても、深く相通ずるものがあつた。殊に奥床しいのは、兩將共にあれただけの勳功を樹てながら、寸毫もそれに傲る所がなく、身を處するに恰も閩巷の老爺の如くであつたことである。兩將壯時の寫眞を見るに、共にあまり健康さうではなく、む

しろ沈鬱な表情である。東郷元帥は大佐時代に病氣で休職になつたことがあり、乃木大將もその健康は鍛鍊によつて維持されたもので、本來はむしろ虚弱な體質であつたさうである。そして、兩將共に内省的であつた。この内省的な點が、兩將をして偉大な教育者たらしめたのであつた。とはいへ、乃木大將はより多く感情的であり、東郷元帥はより多く意志的であつた。乃木大將の和歌や詩には、そこに動く感情の、人に迫り、人を動かす眞實さがある。東郷元帥は沈毅淵默にして底の知れぬやうな趣がある。

乃木大將の自刃は一世を驚倒せしめた。西南役以來命を陛下にお預けしたといふのが大將の心事であつたであらう。その責任感の強さ、その自責の嚴しさ、その明治天皇の御恩遇

に對する感激の深さ、さういふ道義的感情と、大將にとつては最も自然な、どうすることも出来ない意志とが、大將をしてあの擧に出でしめたのであらう。大將にして始めてあの自刃の前に人を黙させることが出来る。

東郷元帥が、震災の時、容易に自分の家を立去らず、遂に自家の火を防ぎ得て災禍を他に擴げなかつたことは、かの最後まで城を守る武將としてのたしなみと共に、隣人に對し、公衆に對してあくまで義務を盡くさうとする市民としての心懸けを見るべき、尊く床しい行爲であり、沈著剛毅にして道義に厚い元帥の風貌をさながらに見る思がある。部分を守ることによつて全體を守り、全體を生かさうとする用意は、恐らく元帥多年の體得によるものであらうが、若しあの震災の當時、東

震災
關東大震災
大正十二年九
月一日

京市民にこの心得があつたならば、あれだけの人を殺し、あれだけの家を焼かずにすんだであらう。日本海の大戦に於ける元帥の態度と共に、教へられる所の多い事實である。

東郷乃木兩將は、かくその自然的な性情に於ては相違してゐたが、その道徳的性格に於ては多くの相通するものをもつてゐた。そして、それはまた、廣く偉大な人々に共通する性格でもある。兩將の如きは、眞の「軍人」たることによつて眞の「人」たり得た偉大な存在であつて、最も高い意味に於ける我が國武士道の完成者であるといつてよい。明治時代がこの兩英雄を同時に有し得たことは、單に時代の誇であつたばかりでなく、國民永遠の幸福であるといはなくてはならない。

(岩波講座國語教育)

口、英代、地、植、歴、物、の、後、修、言

吉田松陰

名は矩方、通稱大次郎、後寅次郎、幕末の先覺者、長門國(山口縣)萩藩士、安政六年(二五一九)歿、年三十

妹

名は千代、兒玉祐之の妻、大正十三年歿、年九十三、十一月二十七日、安政元年

父

杉常道、通稱百合之助、萩藩士

母

名は瀧、村田氏

兄

杉民治、通稱梅太郎

一三 妹に與ふ

吉田松陰

十一月二十七日と日づけ御座候御手紙、並びに九ねぶ蜜柑、かつをぶし、ともに昨晚相とゞき、かこひの内はともし暗く候へども、大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中を察しやり、涙が出てやみかね、夜著をかむりてふせり候へども、如何にもたへかね、また起きて御文くりかへし見候て、いよゝゝ涙にむせび、つひにそれなりに寐入り候へども、まなく目がさめ、よもすがら寐入り申さず、色々なる事思ひ出し申し候。わもじは、父母さまや兄さまの御かげにて、著物もあたゝかに食べものもゆたかに、あまつさへ筆紙書物まで何一つ不足これなく、寒きにもきけ申さず候間、御安心なさるべく候。

新身降獄、末心降、皇帝邦

そもじのお家

兒玉家

をばさま

兒玉寛備の妻

祐之の母

をぢさま

兒玉寛備

通稱太兵衛

祐之の父

萩藩士

萬吉

祐之の子

赤穴

吉田・兒玉兩

家の親族

重寶、便利

十一月廿七日、日づけ、御座候、御手紙、並びに、九ねぶ、蜜柑、かつをぶし、ともに、昨晚、相とゞき、かこひの内は、ともし、暗く候へども、大がい、相わかり候まゝ、そもじの心の中を、察しやり、涙が出て、やみかね、夜著をかむりて、ふせり候へども、如何にも、たへかね、また、起きて、御文、くりかへし、見候て、いよゝゝ、涙に、むせび、つひに、それなりに、寐入り候へども、まなく、目が、さめ、よもすがら、寐入り申さず、色々なる、事思ひ出し、申し候。わもじは、父母さまや、兄さまの、御かげにて、著物も、あたゝかに、食べものも、ゆたかに、あまつさへ、筆紙書物まで、何一つ、不足これなく、寒きにも、きけ申さず候間、御安心なさるべく候。

吉田松陰筆蹟

そもじの御家、をばさまも御なくなりになられ候事なれば、そもじ萬端心懸け候はでは相すまぬ事、殊にをぢさまも年まし御よはひ高くならせられ候事ゆゑ、別して御孝養を盡くし候へかし。又萬吉も日々ふとり申すべく候へば、心を用ひて育て候へ。赤穴のばあさまは御まめに候や。御老人の御事萬事氣をつけ

てあげ候へ。かゝる御老人は家の重寶と申すものにて、金にも玉にもかへらるゝものにこれなく候。そもじ事は、いとけなき折より心得よろしきものとおもひ、

一しほ親しくおもひ候ひし故、このほど御文拜し、入らざる事までも申し進じ候なり。

三日

大にい

別にくだらぬ事、三四枚したゝめつかはし候間、おとゝさまか、梅にいさまに読みよきやうに寫してもらひ候へ。少しは心得の種にもなり申すべく候。

さて御多用の中にも、手習、讀物などは心がけ候へ。正月には、一日は敷入り出来申すべくや。どうぞ兄さまの御休日を与らび参り候て、心得になる話ども聞き候へ。わたくしも其の日わかり候はば、昔話なりともしたゝめて遣はし申すべく、又、正月には、いづくにてもつまらぬ遊び事をするものに候へども、それよりは、何か心得になる本なりとも、讀み

貝原先生

貝原益軒

名は篤信

儒者

筑前國(福岡

縣)福岡藩士

正徳四年(一七

三七四)歿

年八十五

大和俗訓

八卷

教訓書

家道訓

六卷

教訓書

てもらひ候へ。貝原先生の大和俗訓家道訓などは、丸き耳にもよくきこゆるものに候。又、淨瑠璃本なども心得ありてきゝ候へば、ずるぶん役にたつものに候。さて又、別にしたゝめたる文につき、歌をよみ候間、こゝにしるし侍りぬ。

頼もしや誠の心かよふらん文みぬさきに君を思ひて右したゝめたるは、そもじを思ひ候より筆をとりぬるが、その夜そもじの文の到來せしは、定めて誠の心の文より先に参りたるにやと、いと頼もしくぞんじ候まゝ、かくよみたり。

(吉田松陰全集)

一四 心の小徑

金田一京助

叙事詩
コトケラ
来ハス詩
叙事詩
心ヲ表
ハス詩

金田一京助
言語學者
文學博士
東京帝國大學
助教授
盛岡市の人
明治十五年生
ノールウィック
ロシアの巡洋
艦
明治三十七年
我が艦隊と戦
ひ坐礁自沈し
た
大泊
樺太大泊郡大
泊町
亞庭灣に臨む
港市

樺太の南半分が三十年振りて日本へ還つた、その喜のまだ
新な頃、露艦ノールウィックの巨體が大泊の港口に坐礁したまゝ、
まだその残骸を半ば波の上に暴してゐる頃だつた。樺太ア
イヌ語は、北海道アイヌ語とどれ程違ふか。樺太アイヌはど
んな物の言ひ方をしてゐるか。アイヌ特有の叙事詩が、若し
や其處にも傳承されてゐるはしないか。今まで抱いてゐたア
イヌ語學上の疑問とその解決とが、この方言に照らして、若し
や實證することが出来るのではあるまいか。かういふ空想
がいつばいに私の心を占めて、夢にまで見る誘惑となり、とう
とう歴史的思出の多いこの新版圖へ、單身踏査を思ひ立つに

至つたのである。

それは明治四十年の夏のことである。小樽を立つたのは



樺太アイヌ

七月の十二日、樺太の奥山には、木立
に交つて山櫻がちら／＼咲いてゐ
る頃であつた。大泊に船待ちをし、
毎日濃霧を託ちながらしびれを切
らして、やつと米と味噌とを用意し
て、役所の見巡りの小蒸氣に乗せて
貰つて、目指す東海岸へ船出をした
のは十二日目。それでも海の上は
まだ霧が深く、三晩船の上に寝て、二十七日の朝、やつと本船の
ポートで送られて、オチヨポッカのアイヌ部落へ最初の足跡

小樽
北海道小樽市
小樽灣に臨む
港市
オチヨポッカ
落帆
樺太富内郡富
内村落帆

民政署
樺太廳設置以
前の樺太行政
機關

を印したのである。
思ひに思つて遙々訪ねて来たものの、部落の人にとつては、私など何處からか迷つて来た犬ころ程の興も惹かない存在だつた。なまじひに民政署の船に乗つて来た洋服姿は、意地悪な役所の看守人シカアモイナでもあるかのやうな印象をさへ與へて、ともすれば一寸疑ひ深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、誰もみな背をむけてしまひ、口をつぐんでしまふ。笑ひさゝめいてゐた者も笑を納め、寄り合つてゐた者も散じてしまふ。その淋しさは譬へやうもない。皆目言葉が通ぜず、片言隻語ヒナカも採集出来ずに空しく一日が暮れてゆくのである。
役所の船から下りたものだから、居る處だけは、酋長の冬期の住家をがらんどりに明けて、一人ぼつんと居させてくれた



酋長の冬の期住家

のである。又三度々々の食事は、同じ様に髪を垂らした入墨の娘が来て、だまつて私の米と味噌とを小鍋へ入れて持ち去つて、一時間もすると、温かい飯と汁とを作つて来て、だまつて置いて行つてくれる。但し物を言ひかけたら最後、ぐんぐん逃げて行つてしまふ。晝のうちには、まだ繪に描いたやうなアイヌの姿を眼のあたり見てゐるばかりでも慰めになつたが、夜になつて、鼻をつままれるのも知らないやうな闇の中に、磯うつ浪のざあと退いて行く、怪しい音のみを聞いてゐると、物言ふ相手もない淋しさが込みあげて、

啞の上に盲にさへ生まれて来たかのやうな寂寥を感じた。

二日目も同じやうに暮れ、三日目もまたそれを繰返さなければならなかつた。四日目の事だつた。淋しさは、もはや單なる淋しさではなく、東京を發つて一箇月、遂に何の得る所もなく歸らなければならぬのだらうかといふ不安と憂悶が頭をかき亂して、茫然として屋外に立つたちやうどその時、——ふと見ると、後に子供達が何か喚きながら無心に遊んでゐる。行くともなく、その方へ引寄せられて行つたのは、言葉の一はしても拾ひたかつたからである。じつと耳を傾けると何といふ發音だらう。しやつくりしながら物言ふやうな喚きやうで、ひと言も耳に止らない。但し子供だけに、私が近く立つても、別して氣にもせず、夢中に囀つて遊んでゐる。ふと、その

一人の腰に下つてゐる小刀に觸つて、北海道アイヌ語で「それは何なの」と尋ねてみた。子供等は一齊に私の顔を見た。と思つたら、一度にわつと噓し立てて、蜘蛛の子を散らすやうに逃げ散つた。「通じないかな」と獨りつぶやきながら途方に暮れてゐると、又三々五々集つては何か大聲に喚きながら遊ぶのである。又寄つて行つた。今度は言葉を換へて、一人の子の耳に下げた環を指して、何といふものかと問うてみた。又振返つて全部の子供が私を仰いだが、「なに言つてやがる」といつた調子に、「わあ！」と喚いて逃げ出した。

子供等の内に、繪に見る唐子のやうな著物——多分滿洲方面からの外來品——を著てゐるのが一人あつた。その恰好が一寸面白かつたので、單語を採集する筈の手帳へ、せう事なしに、

その子を寫生し始めた。

私が、その子を見ては、鉛筆を動かしく／＼するのを目ざとく見つけた子供の一人が、先づ何とか喚いた。他の子も私を見て、又何とか喚いた。遊ぶのを止して、みんな私を注視した。眞先に見つけた子が、まづ怖々と、しやがんでゐる私へ近寄つて来て、物珍しげに私の描くの覗いた。忽ちどや／＼とやつて来て、みんな覗いた。年かさのが、唐子の服装をした子を指して、「お前が描かれたぞ」とでもいふやうな様子をした。すると、わい／＼と言ひ出して、私の横から覗くもの、背後から覗くもの、中には無遠慮なのが、指を突きだしてもう私の畫面を突つついて、「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ」と言ふやうに、自分の發見を得意になつて、説明を引受けてゐるのさへある。

が、ちつともその言ふ事が聞きとれない。

その時だつた。ふと思ひついて、一枚新しい所をめくつて、誰にもすぐ解るやうに、大きく子供の顔を描いてみた。目を二つ竝べて描くと、年かさのが一番先に「シシ」「シシ」と云つた。他の子も「シシ、他のも「シシ、とう／＼差覗いてゐた子の口が皆「シシ！」「シシ！」「シシ！」「騒がしいといつたらない。その状は丁度、「目だよ、目なんだよ」「うん、目だ」「目だ！」「目だ！」とでも言ふやうに聞えたのである。

さうだ、北海道アイヌは目をばシクと言ふ。樺太ではそれをシシと言ふのかも知れない、といふことが頭へ閃いた。急いで畫の目から線を横へ引つぱつて、手帳の隅の所へ「shish」と記入し、それから悠々と鼻を描いていつた。年かさの子が鋭

い聲で「エトッパイ！エトッパイ！」と叫ぶ。と、残りの子等も聲々に「エトッパイ！エトッパイ！」私は可笑しくなつたのを怵へて、又鼻の尖端から線を引いていつて、その端へ *stupidi* と書き込んだ。そして口を描いてゆくと、やつぱり年かさの子を真先に「チャラ！」「チャラ！」と大騒ぎ。眉を描くと、「ラル！」「ラル！」、頭を描くと、「サバ！」「サバ！」、耳を描くと、「キサラパイ！」「キサラパイ！」

忽ちの内に、肢體の名が十數箇、期せずして採集が出来た。可笑しいやら、愉快やら。かうなつたら、もう何でも無い。向ふから競つて言つて呉れるのだから。

たゞ私は「何？」といふ一語が欲しくなつた。それさへ解れば心の儘に、物を指して、その名を聞くことが出来るのである。

そこで、ふと思ひついて、もう一枚紙をめくつて、今度は滅茶苦茶な線をぐる／＼ぐる／＼引き廻した。年かさの子が首をかしげた。そして「ヘマタ！」と叫んだ。すると他の子供も皆變な顔をして、口々に「ヘマタ！」「ヘマタ！」「ヘマタ！」

うん！北海道で「何？」といふことをヘマングと言ふ。これだと思つたから、まづ試みよう、と身のまはりを見廻して、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ヘマタ？」と叫んでやつた。驚くべし、群る子供らが私の手元へくる／＼した目を向けて、口々に「スマ！」「スマ！」と叫ぶではないか。北海道で石のことをシユマといふ。してみると、スマは石のことで、そして、ヘマタはやつぱり「何？」といふことに違ひなささうだ。

そこで勇氣を得ても一つ、足許の草を手に撈り取つて「ヘマ

「タ？」と高く捧げると、子供達は「ムン！」「ムン！」「ムン！」とびよんびよん跳びながら答へる。私は嬉しさに、子供等と一緒にびよんびよん跳んで笑った。

可笑しかつたのは、私が自分の五厘位しかない七八本の顎鬚を摘まんで見せて、「ヘマタ」と尋ねた時である。聲に應じて、子供等は「ノホキリ！」「ノホキリ！」と答へてくれたので、「Nohkiri」顎鬚」と記入した。何ぞ知らん、それは「下顎」だつた。髯ひげ面に馴れてゐるアイヌの子供達の目には、私の摘まんだ鬚などは「鬚」の數に入らないので、私の指は「顎」を摘まんでゐると思つたのである。

私はかうして忽ちの内に、七十四箇の單語を採集して元氣づいた。折柄、河原に集つて鱒を捕へてゐる大勢の大人達の

所へ下りて行つて、覺えたばかりのほや／＼の單語を勇敢に使つてみた。河原の石を指さしては「スマ」と呼び、青草を指さしては「ムン」、鱒を見ては「ヘモイ」、鱒の頭を指さしては「ヘモイサバ」、鱒の目を指さして「ヘモイシシ」、鱒の口を指さして「ヘモイチヤラ！」

これまで、むつかしい顔ばかりしてゐた髯面が、もじや／＼の髯の間から白い齒をあらはした。これまでそむけ／＼してゐた婦女子の顔にも、眞青な入墨の中から白い齒が見えた。明らかに皆笑つたのである。中には向ふから、網を持つてゐる手を振つて見せて「ヤー（網）」と言つたり、砂地を指さして「オタ（砂）」と言つたりしたものもある。急いで手帳に書きつけながら、その發音を眞似すると、不思議さうに手帳を見に寄つて來

るものもあつた。婦女子の群れでは、「何時覺えたらう」とか、「よく覺えたものだ」とかいふらしい感歎の聲をあげたものもあつた。

かうした間に、私と全舞臺との間を遮つてゐた幕が、いつべんに切つて落されたのである。さしも越え難かつた禁園の垣根が、急に私の前に開けたのである。言葉こそ固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。渠成つて水到る。茲に至つて、私は何物をもためらはず、總べてを捨てて、驀地にこの小徑を進んだ。

一週間の後には、一寸私が顔を出しても、右から左から言葉を投げられる。朝起きて河原へ顔を洗ひに手拭を下げ通ると、兩側のアイヌ小屋から、「どこへ行きますか」「どうしたんで

すか」などと、まるで田圃の蝗が飛び出すやうに、ばた／＼と飛び出して來て言葉を懸け、私が旨く答へられたといつては笑ひ、とんちんかんに答へたといつては笑ひ、顔を洗つてゐると、もう子供達が起きて、後へいつぱいやつて來てゐる。夜は、さしもがらんだらうな私の宿も一杯になつて、身動きもならない程、若い者や年寄が詰めかけて、踊る、歌ふ、喋る。

四十日の滞在の後に、大抵の話は支障なく出來るやうになつた上、樺太アイヌ語文法の大要と語彙と、北蝦夷古語遺篇三千行の敘事詩の採録を家苞に、私は生涯忘れがたい思を残してこの部落の老若に別れを告げた。

(北の人)

志賀直哉
小説家
宮城縣の人
明治十六年生

黒檜
黒檜山
海拔一八二八
米

一五 焚火

志賀直哉

静かな晩だ。西の空には未だ夕映の名残が僅かに残つてゐた。が、四方の山々は蝶々みづりの背のやうに黒かつた。

「Kさん、黒檜が大變低く見えるね」とSさんが舳しほからいつた。

「夜は山は低く見えますよ。」Kさんは艫しほに腰かけて、短い權を静かに動かしながら答へた。

「焚火をしてゐますわ」と妻がいつた。小鳥島の裏へはひらうとする向う岸にそれが見える。静かな水に映つて二つ見えてゐた。

「今頃變ですな」とKさんがいつた。「薪まき取りが野宿をしてゐるのかも知れませんよ。あすここに古い炭焼きの竈かまどがありま

ドナウウエレン
ドナウ河の漣
ルーマニヤの
作曲家イヴァ
ノヴィツチ作
の圓舞曲



黒 檜 山

すから、其の中に寝てゐるのかも知れませんよ。」

小鳥島と岸の間は殊に静かだつた。晴れた星の多い空を、舟縁から其のまゝ下に見るこゝが出来た。

「こつちでも焚火をしませうかね」とKさんがいつた。

Sさんは癖になつてゐるドナウウエレンの口笛を吹きながら漕いでゐた。

「おいKさん。どの邊へ著けるんだい」とSさんが訊いた。Kさんは振りかへつて見て、

「ちやうど此の見當でようござんすよ」と答へた。
それから、なんといふ事なしに、皆は暫く黙つてしまつた。
舟は靜かに進んで行つた。

「此の邊でいゝかい。」

「えゝ。どうぞ。」

Sさんは三權、四權力を入れて漕いだ。舟の舳はざりく
と音をさせて砂地へ著いた。

皆は砂へ下り立つた。

「こんなに濡れてゐても焚火が出来ますか。」

「白樺の皮で燃しつけるんです。油があるので濡れてゐて
もよく燃えるんですよ。私、焚木を集めますから白樺の皮を
澤山お集め下さい。」

一面に羊齒ヤブや山蔞ツツや八つ手の葉のやうな草の生ひ繁つた
暗い森の中に入つて、焚火の材料を集めた。

皆は別れ／＼になつたが、KさんやSさんの巻煙草の光が、
吸ふ度に赤く見えるので、其の居る處が知れた。

白樺の古い皮が切れて、其の端を外側に反らしてゐる。そ
れをたよりに剝ぐのだ。時々Kさんの枯枝を折る音が、ぼき
ん！と靜かな森の中で響いた。

持てないほどになると、岸の砂地へ運んだ。もう大分溜つ
た。

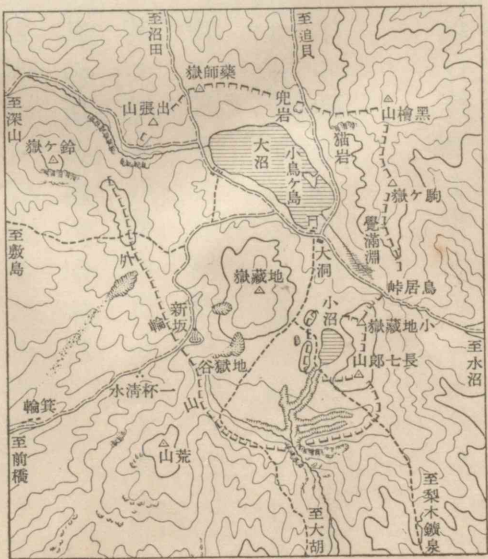
「もう大概ようござんすから、焚きませうかとKさんはいつ
た。

皆は又砂地へ出た。

白樺の皮へ火をつけると、濡れたまゝ、カンテラの油煙のやうな眞黒な煙を立てて、ぼろ／＼燃えた。Kさんは小枝から段々大きい枝をくべて、忽ち燃しつけてしまった。其の邊が急に明るくなつた。それが前の小鳥島の森にまで映つた。

Kさんは舟から楫の厚板を持つて来て、自分の腰を下す所を作つてくれた。

「山には別にこはいものつて、ありませんか。」



赤城山圖

「なんにもありませんよ。」



小鳥島附近

「昔は山犬がゐたんだらう？」とSさんがいつた。

「子供の頃よく聲だけ聞きました。夜中に遠吠を聞くと淋しい、いやな氣持がしたのを覚えてゐますよ。」

Kさんは、亡くなつたお父さんが夜釣が好きで、或夜山犬に圍まれて、岸傳ひに水の中を歸つて來た話とか、此の山が牧場になつた年、馬の死骸が食はれて半分位になつてゐるのを見た話など

をした。

自分は四五日前、地獄谷の方で、小さい野獸の髑髏を見た話をすると、Kさんは、

「きつと笹熊でせう。鷲なんかには食はれたのかも知れませんが、笹熊は弱い獸ですからね」といつた。

「ぢやあ、此の山にはなんにも可_レ恐_レいものはゐないのね」と、臆病な妻はKさんに念を押した。するとKさんは、

「奥さん。私、大入道を見たことがありますよ」といつて笑ひ出した。

「知つてゐますよ」と妻も得意さうにいつた。「霧に自分の影が映るんでせう？」妻はそれを、朝早く鳥居峠に雲海を見に行つた時に経験した。

鳥居峠
海拔一三九三
米

「いゝえ、あれぢやあないんです。」

子供の頃、前橋へ行つた夜の歸り、小暮から二里程來た大きい松林の中で、さういふものを見たといふ話だ。一町位先でぼんやり其の邊が明るくなると、其の中に一丈以上の大きな黒いものが起つたといふ。併し、暫くして大きな荷を背負つた人が路傍に休んでゐたので、其の人が、歩きながら煙草をのむために、荷の向うで時々マッチを擦つたのだといふ事が知れたといふ話である。

「不思議なんて、大概そんなものだね」とSさんがいつた。

「でも不思議はやはりあるやうに思ひますわ」と妻はいつた。「さういふ不思議はどうか知らないけれど、夢のお告とかさういふ事はあるやうに思ひますわ。」

前橋
前橋市
小暮
群馬縣勢多郡
富士見村小暮

「それは又別ですわね」とSさんもいつた。そして急に憶ひ出したやうに、「それ、Kさん、去年君が雪で困つた話なんか、さういふ不思議だね。未だ聴きませんか」と自分の方を顧みた。

「いゝえ。」

「あれは本當に變てしたわね」とKさんもいつた。かういふ話だ。

去年、山にはもう雪が二三尺も積つた頃、東京にゐる姉さんの病氣が悪いといふ知らせを受けて、Kさんは急に山を下つて行つた。

併し、姉さんの病氣は思つた程ではなかつた。三晩泊つて歸つて來たが、水沼に著いたのが三時頃で、山へは翌日登る心算だつたが、僅か三里の道を一晩泊つて行く氣もしなくなつ

水沼
勢多郡黒保根
村水沼

二の鳥居
大洞に在る赤
城神社の二の
鳥居
鳥居
鳥居峠の東麓
に在る

て、Kさんは豫定を變へて、併し若し登れさうもなければ、山の下まで行つて泊めて貰ふつもりで水沼を出た。

そしてちやうど日暮に、二の鳥居の近くまで來てしまつたが、身體も氣持も餘りに平氣だつた。それに月もある。Kさんは登ることに決めた。併し、それから登るに随つて、雪は段段深くなつた。Kさんが山を下りた時の倍位になつてゐた。それでも、人通りのある所なら、深いなりに表面が固まるから左程困難はないが、まるで人通りがないので、軟らかい雪へ腰位まではひる。其の上、一面の雪で何處が路かよく知れないから、いくら子供の時から山に育つて慣れ切つたKさんでも、段々にまゐつてきた。

月明りに鳥居峠は直ぐ上に見えてゐる。夏は此の邊はこ

んもりとした森だが、冬で葉がないから上がすぐ近くに見える。其上、雪も距離を近く見せた。今更引返す氣もしないで、蟻の這ふやうに登つて行くが、手の届きさうな距離が實に容易でなかつた。若し引返すとすれば、幸ひ通つた道の間違はずに行ければまだいゝとして、それを反れたら困難は同じことだ。上を見ると何しろ其處だ。

Kさんは、もうひと息、もうひと息と登つた。別に恐怖も不安も感じなかつた。併し、何だか氣持がぼんやりして來たことは感じた。

「後で考へると、本當は危かつたんですよ。雪で死ぬ人は大概さうなつて、其のまゝ眠つてしまふんです。眠つたまゝ死んでしまふんです。」

よくそれを知りながら、不思議にKさんは其の時少しもさういふ不安に襲はれなかつた。そして兎も角、氣持を張つた。何しろ身體がいゝ。それに雪には慣れてゐた。たうとうそれから二時間餘かゝつて、漸く峠の上まで漕ぎつけた。

雪の深さは一層まさつた。併しこれからは、一寸下りになる。下ればずつと平地だ。時計を見ると、もう一時過ぎてゐた。

遠くの方に提燈が二つ見えた。今時分とKさんは不思議に思つた。併し兎も角、一人きりの所に人と逢ふのは、擦れ違ひにしろ嬉しかつた。Kさんは又元氣を振るひ起して下りて行つた。そして覺滿淵ツクマンの邊でそれらの人々と出會つた。それは、Uさんといふ、Kさんの義理の兄さんと、其の頃Kさん

の家に泊つてゐた氷切りの人夫三人とだつた。「お歸りなさい。大變でしたらう」とUさんがいつた。

Kさんは、「今時分何處へ行くんですか」と訊いた。「今、お母さんに起されて迎へに來たんですよ」とUさんは何の不思議もなささうに答へた。Kさんはぞつとした。

「私が其の日歸ることは知らしてもなんにもなかつたんです。後でできくと、お母さんが寝てゐると、——別に眠つてゐたやうでもないんですが、不意にUさんを起して、Kが歸つて來たから迎へに行つて下さい」といつたんださうです。「Kが呼んでゐるから」つていふんださうです。あんまりはつきりしてゐるんで、Uさんも不思議とも思はず、人夫を起して支度させて出て來たといふんですが、よくきいて見ると、それがちや

うど、私が一番弱つて、氣持が少しぼんやりして來た時なんです。山では早く寝ますからね。七時か八時に寝て、ちやうど皆ぐつすりと寐込んだ時なんです。それを四人も起して出してよこすんですから、お母さんは餘程はつきり聽いたに違ひないのです。」

「Kさんは呼んだの？」と妻が訊いた。

「いゝえ。峠の向うぢやあ、いくら呼んだつて聽えませんもの。」

「さうね」と妻はいつた。妻は涙ぐんでゐた。

「そんな氣がしたといふ位ではなか／＼夜中に皆を起して、腰の上まで埋る雪の中を出してやれるものではないんです。それは卷脚絆の巻き方が一つ悪くても、一度解けたら、凍つて

棒になつてしまひますから、とてももう巻けないんです。だから支度が随分厄介なんです。支度にどうしても二十分やそこらかゝるんですよ。其の間お母さんは、ちつとも疑はずにおむすびを作つたり、火を焚きつけたりしてゐたんです。」

Kさん想ひのお母さんとお母さん想ひのKさんを知つてゐると、此の話は一層感じが深かつた。

先刻から、小鳥島で梟が鳴いてゐた。「五郎助」といつて、暫く間を置いて、「奉公」と鳴く。

焚火も下火になつた。Kさんは懷中時計を出して見た。

「何時？」

「十一時過ぎましたよ。」

「もう歸りませうか」と妻がいつた。

Kさんは勢よく燃え残りの薪を湖水へ遠く抛つた。薪は赤い火の粉を散らしながら飛んで行つた。それが水に映つて、水の中でも赤い火の粉を散らした薪が飛んで行く。上と下と同じ弧を描いて水面で結びつくと同時に、じゅつと消えてしまふ。そしてあたりが暗くなる。それが面白かつた。皆で抛つた。Kさんが、後に残つたおき火を權で上手に水を潑ねかして消してしまつた。

舟に乗つた。舟は小鳥島を廻つて、神社の森の方へ靜かに滑つて行つた。梟の聲が段々遠くなつた。

(志賀直哉集)

長塚節
歌人 小説家
茨城縣の人
大正四年歿
年三十七
金華山
宮城縣牡鹿半
島の尖端に在
る島山

追風
り
逆風

一六 金華山

長塚節

船が岸につくと、道者は一同漸く生き返つたといふ鹽梅で、船ぢや我折つたやあといひながら、ばら／＼と勢よく馳けあがつた。青い芝は地にひつついたやうになつてゐて、絲薄の叢が連なつてゐる。道者が口々に鹿、鹿と呼んだら、思はぬ絲薄の中から大きな角が動いて、鹿が五六匹あらはれた。土産を出して見せると、五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくとついと逃げる。投げてやればたべる。一行の旅装が黄色な桐油を掛けたり、笠をかぶつたりしてゐるので、氣味が悪いのであらう。鹿が煎餅をたべる所を、道者が三四人で手と手をつないで坂の下へ追ひつめようとしたが、鹿は軽く

飛び退いて、けろつと立つてゐる。道者はこんなことをして



(鹿と近附臺燈) 山華金

皆二抱へ三抱への樹ばかりであつた。

雨はしと／＼として深更までやまぬ。廁へ立つたら、目の前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると、鹿である。手を出したら、鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。

翌朝社務所から出た一行十人ばかり、白衣の先達に案内されて金華山に登る。坂が極めて峻しい。曉の霧がひや／＼と梢を渡つて、雨がはら／＼とかゝる。老樹の鬱然として湿つぽい間を行くので、深山の様な寂しい心持がする。忽ち後の方で、猿、猿と呶鳴るものがある。振りかへると、一行のうちの三四人が立ちどまつて梢を仰いでゐる。

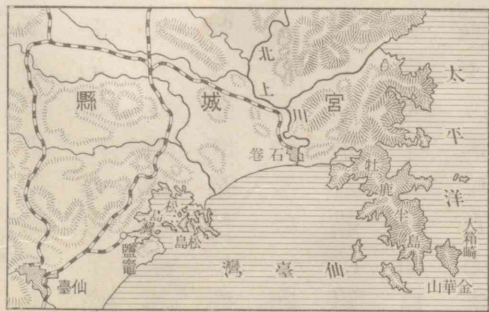


圖 近 附 山 華 金

余も急いでおりて行つて見ると、五六匹の猿が樅の喬木に枝移りをしてゐる所であつた。猿はゆさ／＼と枝を揺るがしながら、こちらを見おろしてゐる。赤い顔がほのかに見える。余は猿の樹にゐるのを見たのはこれが初めてである。からかつて見たいやうな氣もした。一行のものは皆樹の下へ集つて、口々におんつあま、おんつあまと呶鳴つて、手を叩いたり樹を揺すぶる眞似をしたりして騒いだけれど、彼等は一尙平氣で枝をゆさ／＼と揺るがしてゐる。猿といふものは何處で見ても剽輕なものである。道者の一行が騒いでゐるうちに、先達は一人で行つてしまつたかして、後姿も見えなくなつた。ばら／＼と先達の後を追ひかけながら、道者の一人がいふのを聞くと、此の前に來た時は、猿がちやうど栗を揺り落し

た所へ通り掛つたので、みんな拾つてしまつたら、枝から糞を
かけられたといふのであつた。

山嶺の小さな社の縁へ腰をかけて、一行は社務所でくれた
紙包の握飯をひらいた。縁先には、僅かに二坪ばかりの芝生
がある。何處から来たか鳥が二羽、一羽は芝生のめぐりに立
つた樹木の、とある枯枝へとまり、一羽は足もとへおりた。お
りた鳥は嘴をあげたり首を曲げたりして、握飯を欲しさうに
見てゐる。鹿の土産がまだあつたので、投げてやつたら、ひよ
いと一跳ね跳ねてそれをくはへて、元の所へ戻つて、足で押さ
へて食むのである。さうして又、嘴をあげたり首を曲げたり
して見てゐる。握飯を包んだ紙を投げてやつたら、嘴で引返
し引返しして其の紙の中の飯粒を食むのである。幾百千の

参詣者が繰返し／＼登山するので、鳥までがこんなに馴れて
しまつたのであらうが、深い木立の間を雲霧にぬれて漸く山
嶺について、何となく人寰を離れた感じである所へ、こんな鳥
が飛んで来たので、更に別天地のやうに思はれた。一人が握
飯の食ひ残しをくれたら、何と思つたか、それをくはへたまゝ
霧深い谷をさして飛んでしまつた。飛ぶ時に、くはへた握飯
がぼろりと缺けて芝の上へ落ちた。枯枝に止つてゐた一羽
はこちらを見おろしてゐたが、直ぐにおりては來なかつた。
が、これもやがて大きな聲で鳴いたと思つたら、ついと芝の上
の飯をさらつて飛んで行つた。

外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて、蓬々として更に吹きお
ろす。木の葉が交つて飛び散る。霧の吹きつける中を山陰

へおりの。やつぱり樹木が深くて坂が急である。だん／＼おりに行く内に霧が薄らいで、枯れた梢の間から空が朗かに見え出した。又誰か後の方で、鹿、鹿と呶鳴つた。あれ／＼と一人が指してゐる方を見たら、其の時はピオウと鳴いた聲ばかりで鹿は見えなかつた。ピオウと又鳴いた時は聲が遙かに遠くなつて、三聲鳴いた時はやつと聞き取れる程であつた。深い樹立を出ると、疎らな赤松が見え出して、窪んだ草原のやうな所になつた。此處からすぐに海へ出る。岸は皆削りたつた大きな巖である。断面には縦横に切れ目があつて、恰も十文字に繩を掛けた大荷物が問屋の庭に積み上げられたやうな形である。小徑は此の斷崖の上をめぐりめぐつて北へ走る。一行はばら／＼になつて先達に跟いて行く。左を

仰いで見ると、鬱蒼たる山の巔は頭に掩ひかぶさつたやうで、其の急峻な山の脚は、恰も物陰から大手を開いて現れた人が、奔馬をばつたりくひ止めたやうに、此の小徑で中斷されてゐる。小徑には到る處青芝と絲薄が茂つてゐる。さうして絲薄の中には疎らに赤松が聳えてゐる。時々鹿に逢ふことがある。山陰にゐる鹿は、よく人に馴れてをらぬと見えて、きつと逃げて行く。一つか二つ群れから離れてゐるのが、ひよつこり人を見ると、非常に狼狽して叢を跳ねて逃げて行く。絲のやうな脚で跳ねるのが、ふは／＼とした綿の上でも跳ねるかのやうに、如何にも輕げである。驚いて逃げる時にピオウと細い聲で鳴き捨てるのである。五六匹も揃つてゐると、體と體と押し合ふやうにして、或距離の所まで行くと、けろつと

して何時までもこちらを見送つてゐる。

大箱の岬といふ札の立つた所へ出た。急な山の脚が海へ踏みこむ前に、青芝の小山を拵へて、其の小山の頂近くから截斷して海へ捨ててしまつた時に、恐しい懸崖が出来た。これが大箱の岬である。四つに這うて覗いて見ると、さらさらと纔かに碎ける白波が遙か下の方にある。

際涯もない外洋を望むと、今日ばかりは波がないのかと思ふ程平靜である。余は、一朝暴風が此の平靜な海を吹き亂して、雲と相接してゐる水平線の先の先から煽り立てて來る激浪が此の大箱の懸崖に吼えたけび、しぶきのとばしりが、此の青芝へ氷雨の如く打ちかゝる時に、牡鹿が角を振りたてて此の岬に突立つ所を想像して見た。

(長塚節全集)

齊藤茂吉

歌人

醫師

醫學博士

山形縣の人

明治十五年生

一七 雜草

齊藤茂吉

こゝの庭には、昨年から雜草が思ふ存分にはびこつてゐる。昨年の春は草が未だ小さい時分に幾らか除いたが、今年は手が足りないもので、たゞ延びるに任かせるより仕方がなかつた。七月に入つたころには、もう雜草は延びられるだけ延びた。そして花を持つ前の油ぎつた光を見せ、僕の脊丈の没するまでの高さに達した。

雜草といつても、僕がその名前を知らぬものが多かつた。しかし、いろ／＼の草の生える有様を見てゐると、暇の無い僕のやうな者の心をも惹く點が一つ二つはあつた。焼け跡に立てた風呂の歸りなどに、僕は幾らか落著いた氣持になつて、

雑草のだん／＼延びて行く有様を見てゐることがあつた。春の初に萌え出でた藜は、數でこなして無數に生えた。その柔らかな時分にはよく茹でて食つたが、やがて丈も延びて行つて、ほかの雑草の領分をも侵す勢を示した。藜は、假令他の雑草のなかにあつても、滅びない草だと僕は思つた。

それから、咲いた花を見ると菊科植物で、多分山白菊ではないかと思はれるのが無數に生えた。この草もいつの間にか僕の脊丈を追ひ越し、小さい白い花が澤山咲いてゐるのを見ると、如何にも繁殖力の強いことを思はせた。それらの間に生えてゐる犬蓼だの、金線草だのは、極めて弱々しい幽かな花のやうに見える。藪草なども一時強いはびこり方を示したが、今はさういふ丈の高い雑草の下蔭になつてしまつてゐる。

その間に葉の大きい竹煮草の繁りがまた一段と目立つて見えてゐる。併し、これは株の數がさう多くはない。

さういふ草の中に立交つて、數も多く、丈もだん／＼延びて行く草があつた。これは、春先には、葉の柔らかくかはゆらしい草として、すさまじい焼け跡に一種の風致を添へてゐるのであつたが、春も更け、初夏になり、夏も眞中に近づく頃には、ほかの雑草を壓迫する勢を示して行つた。そして尖端の方に細かい枝がさいいて、無數の小花を著けようとしてゐる。

風呂の歸りなどに、僕はこの草の前に突立つて、一體何といふ草だらうと何時も思ふのであつたが、計らずも、事務員の一人在この草の名を知つてゐて、姫昔蓬といふことを教へてくれた。

それからちよつと書物を調べると、成程この草の名が出てゐる。この草は近世舶來して來たもので、鐵道草、御一新草、明治草などともいふと書いてある。そして非常な勢で殖えることもまた書いてある。僕は、この草が外國から渡つて來て、傳來の雜草を壓迫してゐる有様を見てゐたのである。遙々と海を渡つて來て異境に根をおろさうといふものには、何か猛烈な強いところがある筈である。また異境といふ一つの要約が既にこの根強さをつよめさせることもあり得るのである。

流行病がさうである。流行しはじめた時には、その黴菌の繁殖力は非常に強い。そんなら、いつまでもその猛烈の度を保つてゐるかといふに、事實はさうではない。そんなことを

考へてみると、今幾年か経つうちには、姫昔蓬の繁殖力も衰へるかも知れぬ。そして、傳來の雜草が、今は異國草の下くさの形になつてゐても、追々は、二たびその異國草を牽制して、その繁殖をさう恣にはさせないかも知れぬなどといふ空想も浮かんで來て、五分や十分の時は経つてしまふ。そして風呂あがりの汗も乾くのである。

眞夏も過ぎて、馬追の鳴く頃になると、脊の高いのも低いのも、花を著け實を結ぶやうになる。さうすると雜草の風趣は全く變つて來て、油ぎつたやうな色調はもう見られなくなる。

(念珠集)

北原白秋
名は隆吉
詩人 歌人
福岡縣の人
明治十八年生

一八 風

北原白秋

遠きもの
まづ揺れて、
つぎつぎに、
目に揺れて、
揺れ来るもの、
風なりと思ふ間もなし、
我いよいよ揺られはじめぬ。
風吹けば風吹くがまま、

我はただ揺られ揺られつ。
揺られつつ、その風をまた、
わがうしろ遙かにおくる。
吹く風に揺れそよぐもの、
目に満ちて、
翔る鳥、
ただ一羽、
弧を描けば、
揺れ揺れて、
まだ、空の中。

吹く風の道に、

驚きやまぬものあり、

光り、また暗みて

をりふし強く、急に強く、

光り、また暗む、

すべて秋、今は秋。

輝けど、

そは遠し、

尾花吹く風。

〔出所〕
白秋詩抄

一九 昆蟲の本能

フアーブル

フアーブル
1823—1915
フランスの博
物學者
じがばち
膜翅目似我蜂
科じがばち屬
の昆蟲の總稱
はなだかばち
同目高鼻蜂科
はなだかばち
屬の昆蟲の總
稱

日が暮れかゝると、井戸掘り最中の「じがばち」は、石の蓋で戸
締りをして工事場から出て行く。そして花から花を追ひな
がら、どこかへ行つてしまふ。が、その翌日は、前日掘つておい
た住居に、青蟲を持つてちやんと戻つて来る。又「はなだかば
ち」は、獲物を擔いで、砂で塞がれてその邊一帶の砂地と見わけ
のつかなくなつてゐる玄關口に、いつもびたりと降り立つ。
彼等の一瞥とその記憶とは、過つことのない確さがある。
いはば昆蟲には、我々にはそれに似寄つたものもない一種の
方位感、私が假りに記憶と呼んでおく一つの能力があるとも
いへよう。記憶と呼んだのは、他に何とも言ひ表しやうがな

いからだ。私は出来るなら、昆蟲心理學のこの點に幾らかでも光明を投じようと、一わたり實驗を施してみた。

最初の實驗の相手は「こぶつちすがり」。朝の十時頃、同じ傾斜地の上、同じ部落で、巢穴の穴掘りや庫入れにいそしんでゐた雌を十匹捕へて來た。各の俘とらひは別々に紙袋に閉ぢこめられ、一つの箱の中に入れられる。そして巢の敷地から二キロメートルばかり離れた所に放たれる。勿論、私はその前に、後で見わけられるやうに、不變色の繪具で胸の中央に白點をつけておくことを



こぶつちすがり

こぶつちすがり
膜翅目土棲蜂
科つちすがり
屬の昆蟲

忘れなかつた。

この蜂は、いろんな方向に向かつて一寸飛び立ち、草の葉の上に足を留め、太陽が眩しいのか、暫く前跼で眼をこすつてゐる。それから、少しも迷はずに、南の方彼等の住居の方向を指して急ぐのだつた。五時間後、私は巢の共同敷地に戻つてみた。そして白い印のついた「つちすがり」が二匹、もう仕事をし
てゐるのを見つけた。間もなく、第三のものが足に「ざうむし」をさげて野から歸つて來た。それから第四のものがその後
に續いて來た。四匹の蜂がやりおほせたことは、おそらく他のものも、もうとつくに成し遂げてしまつたのか、でなければ、
これからやりおほせるであらう。
しかし、半徑二キロメートル程の所は、多かれ少かれ彼等に

つちすがり
こぶつちすがり
の略
ざうむし
鞘翅目象鼻蟲
科の昆蟲の總
稱

知られてゐるといふこともあり得よう。私は距離をもつと遠くして、この蜂が知つてゐるとは到底思はれないやうな出發點でも一度實驗をやり直す必要がある。

そこで、その朝材料を捕へて來た同じ巢穴の群から、私は九匹の「つちすがり」の雌を捕へた。選ばれた出發點は、巢穴から三キロメートルばかり北にある隣町だ。日は大分晩くなつたので、蜂は運ばれて來た箱の中で夜を過すことになつた。

翌日の朝八時頃、私は今度は白點を二つづつ胸につけて、それから一匹づつ町の真中で放してやつた。放された「つちすがり」は、最初二列の家並の間を真直に空に昇つて行くのだつた。ちやうど、町の混雜を出来るだけ早くのがれて、廣い地平線を望み得る點に昇らうとでもするかのやうに。それから

屋根を見下して、直ぐに元氣に、南を指して矢のやうに飛んで行つた。明くる日私が巢穴を訪問すると、胸に二重の白點をつけた「つちすがり」が五匹、何の變事も起らなかつたかのやうに、工事場で元氣よく働いてゐた。

かうして彼等が突然思ひがけぬ遠方に運ばれた時、彼等は巢穴に戻るために、記憶を辿つてゐるのだらうか。彼等がある高さのところを昇つて、そこから一種の目標點を定めて、巢のある方へ全飛行力をあげて飛んで行く時、始めて見る野を越え山を越えて空中に行手を標識づけてくれるのは記憶だらうか。明らかに、さうではない。蜂は今ある場所を知らないので、又どつちの方から連れて來られたかも教へられてないのだ。旅行は眞暗な箱の中で行はれたのだ。けれども

彼等は自分が今どこにゐるかがわかる。彼等は、だから單なる記憶より以上のものに導かれてゐる。つまり、彼等は、特別な能力、一種の方位感を持つてゐるに違ひない。

私は、この能力がどのくらい鋭く正確であるか、またその働く常の條件から離れねばならない時、それはどの位ちよ味あじいものであるかを、實驗によつて證明してみよう。

幼蟲への食料補給をやつてゐた一匹の「はなだかばち」が巢穴から出て行つた。彼は、もう少し経つと、また獵の獲物を持つてやつてくるだらう。巢穴の入口は、蟲が出掛ける前後退りに掃いて砂で念入りに塞がれる。けれども彼は歸つて來るや、上に述べたやうに、一つの勘でもつてその戸口を見つめる。

何かごまかすための魂膽を凝らしてみやらうと、私は入口を掌位な平石で覆つてやつた。やがて蜂は戻つて來た。しかし、留守中に起つた大變化は、彼を少しも迷はせなかつた。彼はすぐ石の上に下りて、その上をあちらこちら馳け廻り、まはりを廻つて見て、その下に潜り込んで、びつたりと巢穴のある方向に土掘りをやりだした。

そこで私は、蜂を追ひ拂つておいて、今度は近くにあつた馬糞を切つて細かにして、それを厚さ二三寸ばかりの層に、巢穴の入口とそのあたり一帯に撒いた。その色合と、材料の性質と、馬糞の臭とが一緒になつて蜂を惑はせるだらう。まさかこの汚物を我が家の玄關口だと見て取りはしまい。——やがて歸つて來た蜂は、高みから敷地の見なれない状態を調べ調

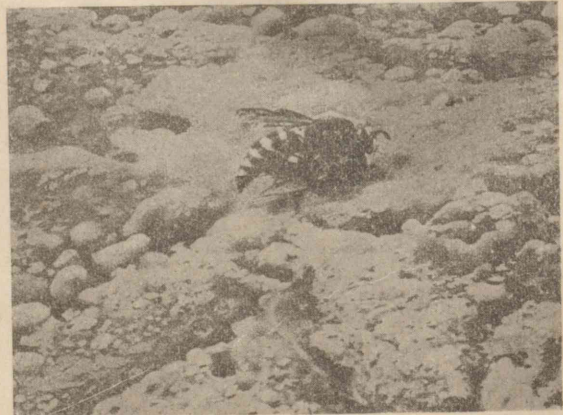
べして、あやまたずこの層の中心、入口の正面にびつたりと降り立つ。發掘する。廻廊の口はそこに直ぐに見つけられる。私は一度蜂を遠くへ追ひ拂つた。

折好くも、私はエーテルの小さな罫を所持してゐた。そこで、擴げた馬糞を掃ひ退け、かなり廣い苔の褥と取換へる。苔の上にエーテルをあけておくと、ぢきに蜂はやつて來た。エーテルの蒸氣があんまりきついので、彼は一寸傍わきに退いてゐたが、やがてその苔の上に飛び下りて、障礙物を通過して我が家にはひつて行つた。

今度は昆蟲を案内する力のある、特別な感覺の座といはれる觸角の方面から試してみようと、はなだかばちはなだかを捕へ、觸角を根元から斷ち切つて放してやつた。蟲は矢よりも早く飛

んで逃げた。私は戻つてくるかどうか甚だ危みながら、たつぷり一時間ほど待つてゐた。蜂は戻つて來た。そして、觸角のある蜂と同じやうに、やすくと自分の住居に入つて行つた。

かくて、外見を變へた敷地も、色彩も、匂も、材料も、また傷口の痛みも、總べて蜂を惑はすことは出来なかつた。私は、昆蟲が何か我々に知られない能力を持つとしな



ちばかだなは

い限り、どうしてもこの問題を解くことが出来なくなつた。

その後、一つの實驗の機會がうまく現れて、新しい見地から

この問題を再び取上げることになった。それは、はなだかばちの巢穴を、ひどく無理をせずにつつかり裸出することだ。この目的のために、砂は少しづつ小刀の先で掻き取られた。屋根がなくなつてみると、この地下住宅は眞直な、或は曲つた溝だ。長さは二デシメートル位、戸口であつた點は明けはなしでも一つの端は行き止りで終り、そこに幼蟲は食物の眞中に横たはつてゐる。

母蟲は、戻つて來たとき、どう振舞ふであらうか。勿論、母蟲は、その幼蟲に食物を與へるためにやつてくるのである。けれども、この幼蟲のところへ行くには、先づ戸口を見つけないければならない。裸蟲に戸口、それがこの問題に於ては別々に考察されなくてはならないと思はれる二つの點だ。私は、そ

れ故、まづ裸蟲と食物とを取り去つた。すると廊道の底は空虚な場所になつた。これで用意は出來た。

やがて蜂がやつてくる。そして玄關しか残つてゐないこの戸口へ、眞直に行く。そこで、表面を掘つたり、掃いたり、砂を飛ばしたりして、頭で押せば樂に明いて通路を作つてくれるあの動きやすい戸締りを懸命に探してゐる。が、動き易い材料の代りに彼はまだ掘り返されてゐない堅い地盤に出くはす。この抵抗を感じると、彼は地面を調べまはすだけにしておく。地面といつても、それはいつも出入り口がある筈の場所の極く近くだけだ。「戸口はそこにあるのだ、餘所にはない」といふ彼の確信は、それ程確乎たるものだ。私は、幾度か藁でそつと彼を他の點に押しやつた。蟲は私のするまゝになつ

てゐる。けれども彼は直ぐさまその門の敷地に戻つて来る。時々、半暗渠となつた廊道は、いくらか彼の注意を惹くらしい。二度か三度、私は彼が溝を端から端まで通つて行くのを見た。彼は幼蟲の住部屋の行き止りに行きついて、そこを注意もせず引掻いてから、入口のあつた點に急いで戻り、そこで又強情に探索を續ける。

それでは、幼蟲がゐたらどんなことが起るか。これが問題の第二の點だ。私は、實驗のためにもう一つの新しい巢をさがした。

巢穴は先刻と同様、端から端までむき出しにされた。けれども今度は、幼蟲や食物はそのまゝにしておいた。ところで、玄關でも廊道でも、幼蟲とその食物の雙翅類の山のある底の

部屋でも、隅から隅まで手に取るやうに見えるこの明けはなしの住居の前で、蜂は例の如く入口のあつた點に足を下す。母蟲が掘り、砂を掃くのはそこだ。母蟲が幾寸かの半徑内にある他の場所で一吋試した後、いつも戻つて来るのはそこだ。苦悶状態にある幼蟲のことなど全然問題にしてゐない。それは、さしあたり彼女にとつて、地面の上に散らばつてゐる小石や土塊と何の異なるところもない。幼兒の搖籃に行くために死力を盡くしてゐる母親にとつて、今必要なのはたゞ單なる出入り口だけだ。息子は眼の前で太陽に焼かれてゐるのに、母蟲は今も存在してゐない通路を探すことしか考へてゐない。この愚昧な母性愛を前にして、私はたゞ驚くの外はなかつた。

母蟲は長い間迷つた揚句結局元の廊道の残りである溝の中にはひる。時々廊道の底現に幼蟲の横たはつてゐるその地點にまで達する。母と子とは對面する。長い苦しみ悶えの後のこの對面に何等かの母の歡のしるしがあるだらうか。母蟲はその幼蟲を見覚えてゐない。彼女は裸蟲の上を歩く。容赦なく踏みつける。部屋の底の開鑿を試みようとして、無慙に蹴とばして後の方に踏みのける、押し出す、ひつくり返す、放逐する。こんな風に手荒くされると、幼蟲の方でも考へてくる。私は、それがまるで獲物の雙翅類の肢でも齧るやうに、遠慮なく母蟲の附節に喰ひつくのを見た。母親は翅鳴を立てながら、驚いて姿を隠してしまふ。そして再びその好みの場所、住居の玄關に戻つて、そこで徒らな探索をつゞける。

これが本能の諸行爲のつながりである。それはどんな重大な事情でも亂す力のない一つの順序を以て、一つが他を呼び求める。入口がないといふことのために、第一の行爲が果されない。それで次の行爲も果されないのだ。

本能と智力との間には、何といふ深淵が横たはつてゐることであらう。母が智力に導かれるとき、壊れた家の木屑の中を通つて眞直に息子の處に行く。本能に導かれるとき、それはもと戸口であつた處に飽くまで佇みつくしてゐる。

(昆蟲記)

二〇 石をきざむ

石川啄木

名は一
歌人
岩手縣の人
明治四十五年
歿年二十七

石川啄木

こつこつと空地に石をきざむ音耳につき來ぬ
家に入るまで

こころよきつかれなるかな息もつかず仕事を
したるのちのこのつかれ

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中に
そをききにゆく

港町とろろと鳴きて輪をえがく鳶を壓せる潮
曇かな

窪田空穂

窪田空穂
名は通治
歌人
早稻田大學教
授
長野縣の人
明治十年生

提燈の灯の來るなべにぬばたまの闇の青みて
桑の葉の見ゆ
*つれづれ 暗い夜詞
作者は何處か 野道*

穂薄のそよぎを見やる眼に續き日に光りたる
山脈の見ゆ

霜ばしら踏むにくづれて行く行くもさやけき
音を立つる朝かも

感動詞

木下利玄

歌人

岡山縣の人

大正十四年歿

年四十

木下利玄

向山むかやまの雑木の若葉風とほり揺れいちじるく夏
さりにけり

牡丹花は咲き定まりて静かなり花のしめたる
位置のたしかさ

ふり出でて笹にあたる雨の幽けきに耳すまし
歩みわが行く山路

雨やみてとみに秋づけり村ゆくに物あらふ流
れ澄み透りたる

冬山はぬくとくもあるか裸木のしじに枝くむ
下は日だまり

柳田國男

民間傳承研究

家

元貴族院書記

官長

兵庫縣の人

明治八年生

三好さん

三好重道

實業家

明治四年生

雲仙

雲仙岳

長崎縣島原半

島に在る

海拔一三六〇

米

キャディー

ゴルフの競技

者の手をす

る者

二 鴉勸請

柳田國男

これは三好さんの話である。

雲仙の国立公園のゴルフ場では、たつた一つだけ困ることがある。あの山の鴉は横合からやつて来て、飛んでゐる球をくはへて行つてしまふ。それで、キャディーの任務があそこでは一つ餘分になつてゐる。打ちだすと同時に、わいゝと大聲でわめき立てて、皆して鴉を逐ひ拂はないと、毎度大事な球を取られてしまふからだといふ。

自分はこの話を聞いて、思はず「本當ですか」と言はずには居られぬほど驚いた。しかもさういふ心當りは正にあるのである。同じ經驗は、日本でならば、今後まだ他の地方でも得ら

れるかも知れない。さうして、外國のゴルフ場には、恐らく絶

對にないことであらうと思ふ。

これは動物にも國史があるといふ非常に大切な問題の緒であるから、纔かにわかつて居るだけでも、一應は記述して置く方がよい。

それではまづ試みに、四五人の仲間の寄合の席でどんな印象を與へるかと思つてこの話をしてみたところが、早速にまた、新たな知識を一つ添へることが



雲仙のゴルフ場

神木君
 本名關敬吾
 民間傳承研究家
 明治三十二年
 小濱生
 長崎縣南高來
 郡小濱町
 島原
 島原半島
 南高來郡一圓
 の地

出來た。友人の神木君は、雲仙の西麓、小濱といふ海岸の町の人であるが、同君は、それは如何にもあり得ることだと言ふのである。同君等の少年の頃には、圓い平たい小石を拾つて、鴉の群れを目がけて投げつける遊があつた。さうすると、鴉は飛んで来てそれをくはへようとする。つまり、雲仙のゴルフ場が開けるよりもずつと前から、島原の鴉どもは、皆そんな練習をして居たわけである。今でも子供たちは、同じ遊をして居るかも知れないが、同君等の子供の頃には、その石を投げながら、

鴉かんじよう 猫かんじよう

といふ詞を唱へて居た。さうして、その「かんじよう」を子供心に「食はぬぞ」といふ意味に解して居たさうである。

さうすると「この石は餅のやうな形をしてゐるが、石だから食ふわけには行かまい」と嘲るつもりであつたものか、或は又、「これは餅だが食はないか」と欺くやうな氣持であつたものか、いづれであつたかが問題になるが、さういふ細かな點はとにかくとして、この解釋も實は誤であつたらしいのである。今までの子供の遊戯は、大抵は成人の所作の摸倣であつた。これも多分は古い時代に餅を鴉に投げ與へた際の唱へ言で、「鴉勸請」は即ち鴉を迎へて饗應をするといふ意味であつたのを、後へ口拍子に「猫勸請」を付け添へたものと思はれる。自分はさういつて獨りで感心して居ると、傍から又注意してくれた人がある。關東の子供等は、今でも鴉の空を行くのを見ると、

鴉はかあゝ勘三郎

雀はちうゝ忠三郎

とんびは熊野のかねたゝき

百日たゝいて麥一升

などと、何も投げずに、たゞかういつて囃すが、文句の長くなつたのは面白づくであつて、この「勘三郎」も本來は「鴉勸請」即ち鴉を招待する時の言葉から出たものかも知れぬといふのである。なるほど、それもまた一つの發見かも知れぬ。しかしこれは、猶一應、東京近郊のゴルフ場でも、折々は飛ぶ球をくはへにくる鴉があるか否かを、確めてから問題にしても遅くはない。

我々がこゝで考へてみなければならぬのは、島原半島の鴉

の、ゴルフの球をくはへに來る技術は、果して兒童の惡戯の、圓い平たい石ばかりでこれを養成することが出來たかどうかである。これには、今一つ以前の久しい期間、投げて食はされるのが御馳走の餅であつた時代が續いて、その結果、空中に投げられる圓くて白いものを、飛んで來てくはへる習性が生じたのではないかといふことである。

人間が今のやうに逼迫するよりも以前に、もう九州ではこの鴉祭は絶えてゐる。たゞ子供と鴉だけが、その古い契約を、僅か片端だけでも猶憶えてゐるのではあるまいか。

芳賀矢一

文學博士
東京帝國大學

教授

帝國學士院會

員

福井市の人

昭和二年歿

年六十一

上田

上田萬年

文學博士

東京帝國大學

教授

帝國學士院會

員

名古屋市の人

昭和十二年歿

年七十一

松井

松井簡治

文學博士

東京文理科大

學名譽教授

千葉縣の人

文久三年(二

五二三)生

三三 學者の苦心

芳賀 矢一

十年一昔といふことを思ふと、上田松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれてうち興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に嫁いて人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や其の第一巻がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流れは水の流れと同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極まりがない。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易の進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、かういふ中に、徐々に其の工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘り出されて、選り分けられ、鑄分けられてゆく鑛石のやうに、幾萬幾十萬とも知れない古語や新語は、幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書き留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められてゆく。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事ははてしなくいつまでも續く。傍から見れば、抄の行かぬことは齒痒いやうで、何時

松井君の邸
 東京市小石川
 區關口駒井町
 に在る

かたのつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分からぬ。二君の筆と頭腦は間斷なく此の間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、其の進歩は遅いが、其の成果は確實であつた。かくて、粒々積み上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂が稍緒に就いたまてには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻となく進水式に浮かび出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目覺しく世人を驚かさやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども、一たび其の室に入つて

山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずにはゐられぬ。又編纂者の決心と根氣とを尊敬せずにはゐられぬ。さうして、それが決して學者の閑事業ではなくて、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、随つて國家教育の根柢となる國語の調査、整理が緊急な事業であることはいふまでもない。國家は、軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に頼らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狭い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふ所に、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて、鐵道の哩數や軍艦の噸數の大いに増加

したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦位で満足してゐた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬へるべき本書を有するに至つたことを驚歎し、慶賀しななければならぬ。文物の整備することは、國家の誇であり、精神界を支配する有力な武器である。完全な一辭書の存在することは、國民にとつての大きな強みである。此の一大産物が堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感じる所以である。此の十年は、國語界に於ても亦無意味な十年ではなかつたのである。學者の事業は、いつも世間と没交渉のものではない。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ても、進歩して行く世間を、一

日も餘所に見てゐる譯にはゆかぬ。十年一昔の間には、國語其のものの中にも、絶えず變遷が行はれてゐる。それに注意するだけでも容易の業ではない。靜寂な編輯室は、紛糾した實社會と常に相往來してゐるのである。幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ず之を、明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。余は二君の満足と喜悅を察知すると同時に、今かくと十餘年を待ち暮した同友とともに、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。

(大日本國語辭典序文)

渡邊華山

名は定靜

通稱登

畫家

幕末の先覺者

三河國(愛知

縣)田原藩士

天保十二年

(二五〇)歿

年四十九

日本橋

現東京市日本

橋區に在る

備前侯

備前國(岡山

縣)岡山藩主

池田氏

爽鳩先生

鷹見星卓

名は允

儒者

田原藩士

父

渡邊定通

田原藩士

二三 天下第一人

渡邊華山

私十二歳の時、日本橋邊通行仕り候節、わすれも仕らず、備前侯の御先供に當り、打擲を受け候時、子供ながらも大息仕り候は、右備前侯、御年は大體同年位にて、大衆を率ゐ御通行なされ候事、天分とは申しながら、同じ人間にてと發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來申すべくと存じ、其の頃、高橋文平と申すもの、御祐筆相勤め候が、私子供には候へども、同人合口にて候間、相談に及び、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成り申すべくと決心仕り候へども、私父二十年來の持病にて、一日も看病按摩仕らざることとはこれなく、朝夕これを奉公同様に心得、母の手だすけ仕り候。其の上、兄弟皆幼少

板橋
現東京市板橋
區の内

にて七人もこれあり、唯母の手一つにて其の日を送り候こと故、何分右様の餘裕これなく、貧窮は筆紙の盡くし候處にはこれなく、依つて弟共は寺へ奉公に遣はし、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣はし候。其の艱苦のうち、私十四歳ばかりの時、幼少の弟を板橋まで生き別れに送り參り候時、雪はちらちら降り來り、弟は八九歳にて、見も知らぬあら男に連れられ、後を振向き、別れ候事、今に目前に見え候如くに御座候。



圖門高公子
(筆山華邊渡)

本所一つ目
現東京市本所
區千歳町附近

私母は近來まで、夜中寝ね候に、蒲團と申すもの、夜著と申すもの引きかけ候を見及び申さず、やぶれ疊の上にごろ寝仕り、冬は炬燵に臥せり申し候。私父は大病故、高料の藥種、日食の麵類等に事缺き、疊建具の外、大抵質物に置き盡くし、尙借財親類共にも借り盡くし、僅か南簾一片の儀にて、母方の身内のものに山伏これあり、本所一つ目に住居仕り候方へ、母は弟を背負ひ、雪を冒して罷り越し、夜に入り候て歸宅仕り候。其の節、私洗足の湯をわかし候とて、衣服を焦し、大いに叱られ候儀、今に覺え罷り在り候。

芝
現東京市芝區
の内

依つて、尙高橋文平に相談仕り、とても、學問などと申し、儒者に相成り候とて、金のとれ候儀はこれなく、それよりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、十六歳の時、爽鳩先生を頼み、芝の

白芝山
白川芝山
畫家

金陵
金子金陵
名は尤圭
畫家
江戸の人
文化十四年
(一四七七)歿

文晁
谷文晁
名は正安
畫家
天保十二年歿
年七十八

白芝山と申す畫工に入門仕り候。然る處、貧人にて附け届け行届かずとて、僅か二年にて師家より斷りを受け申し候。私も此の時は如何仕るべきかと泣き沈み候處、父の申し候は、金陵は其の旨申したらば、憐み申すべくと申すにより、弟子と相成り申し候處、金陵殊の外相憐み、少々は出來候様に相成り候へども、半紙を調へ候手段これなく、初午燈籠の畫を作り、百枚にて壹貫の錢を取り、冬分に相成り候へば、右を以て紙筆を調へ申し候。

さりながら學問は仕り度く候へども、何分閑暇これなく、冬に相成り候へば、朝七つ時起き出でて飯を焚き、其の焚火にて讀書仕り候。右は、文晁など私を憐み、畫道取立てくれ候節、文晁毎曉起き出でて畫を認め候話を承り、奮發致し候儀に御座候。

右畫事少々づつ内職と相成り、稽古出來候も、前爽鳩先生の恩澤に御座候。

私二十六歳の正月元日、鈴木孫助宅にて打寄り致し、私申し候は、何分、上かくの如き御困難なれば、各方も拙者も今より心がけ候はば、御政道を佐くべき道もこれあるべくと契約致し候。依つて學問仕り度く候へども、何分寸暇これなく、夜中にも参り申すべく、父より御門限の儀願ひ候處、仰せ出され難き旨御沙汰にて、志相挫け申し候。

つらく存じ候は、上にして君に忠、下にして親に孝、皆此の學問より出て來り候儀、ましてや上へ忠と申すことは、無學、無術にてはかなひがたく候。愈以て繪事を専らとし、急にしては貧を助けて親を安堵させ、緩にしては天下第一の畫工と相

成り申すべき一事に思ひ定め申し候。

(華山全集)

國語卷三終

昭和十二年七月三十日發行
昭和十一年八月十四日訂正再版發行
昭和十二年六月二十二日訂正再版發行

國語全十卷
定價各冊金五拾五錢

(永井製本) 2/1

版權所有



編輯者

岩波編輯部

代表者

岩波茂雄

發行者

岩波茂雄

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者

白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地

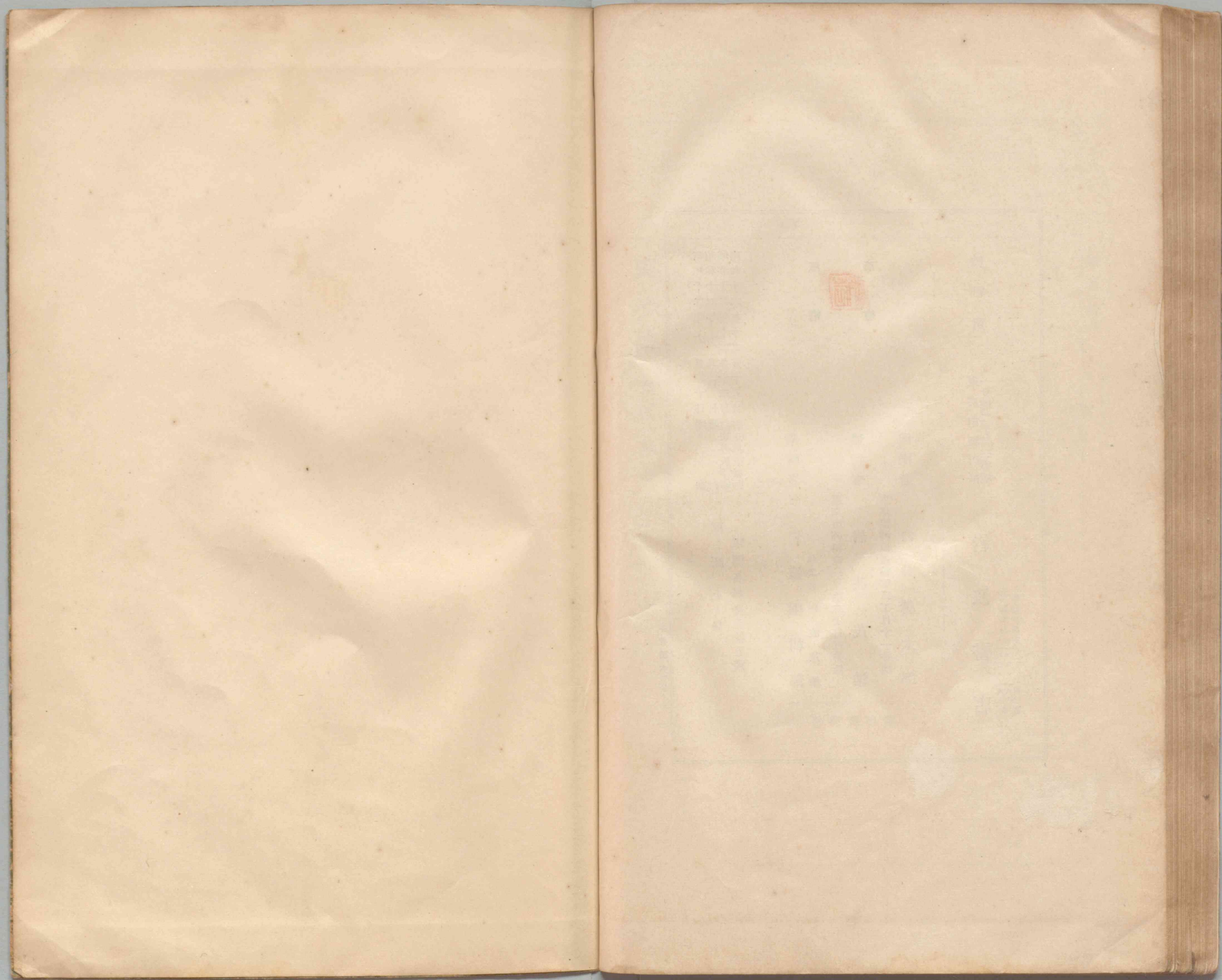
精興社印刷

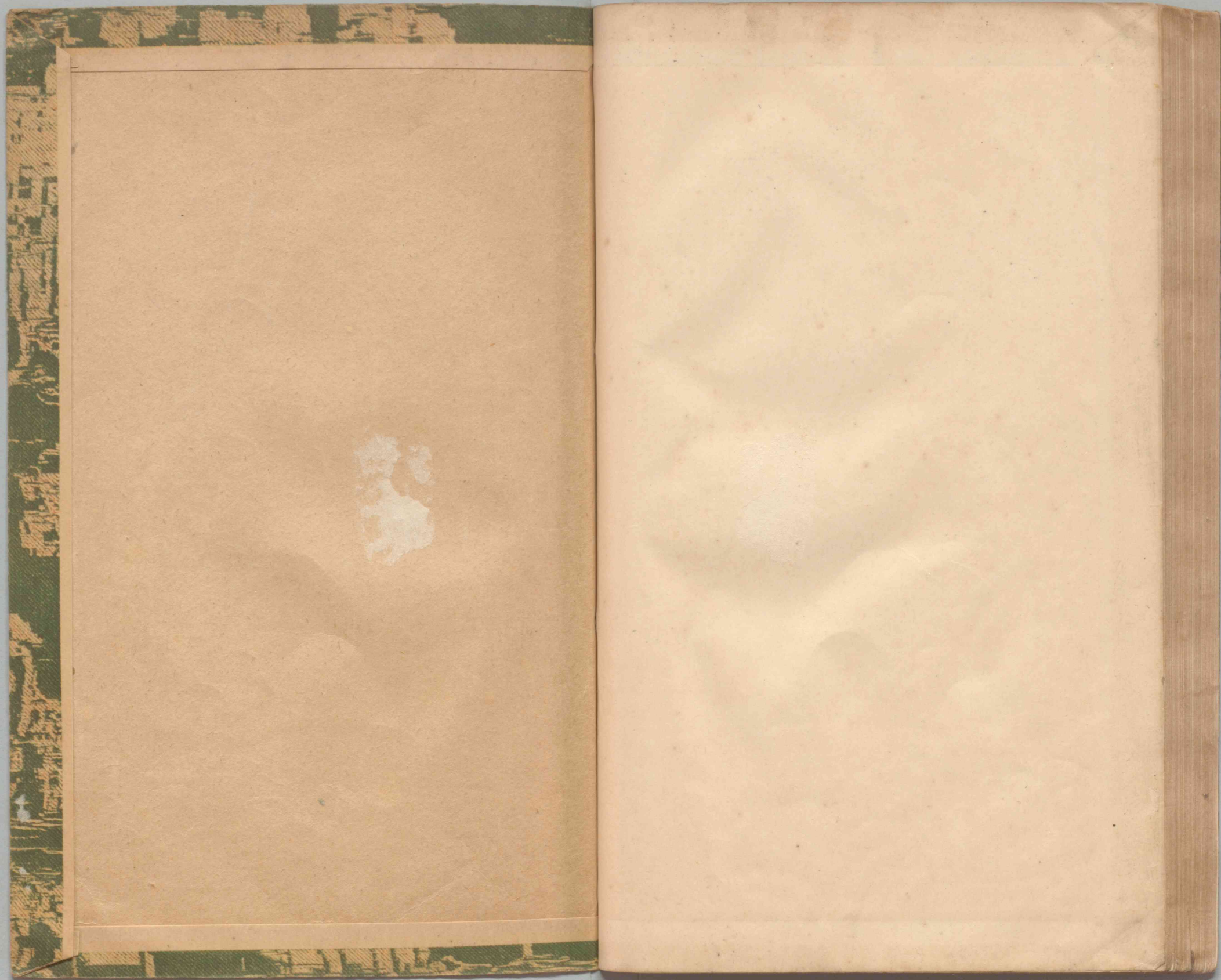
發行所

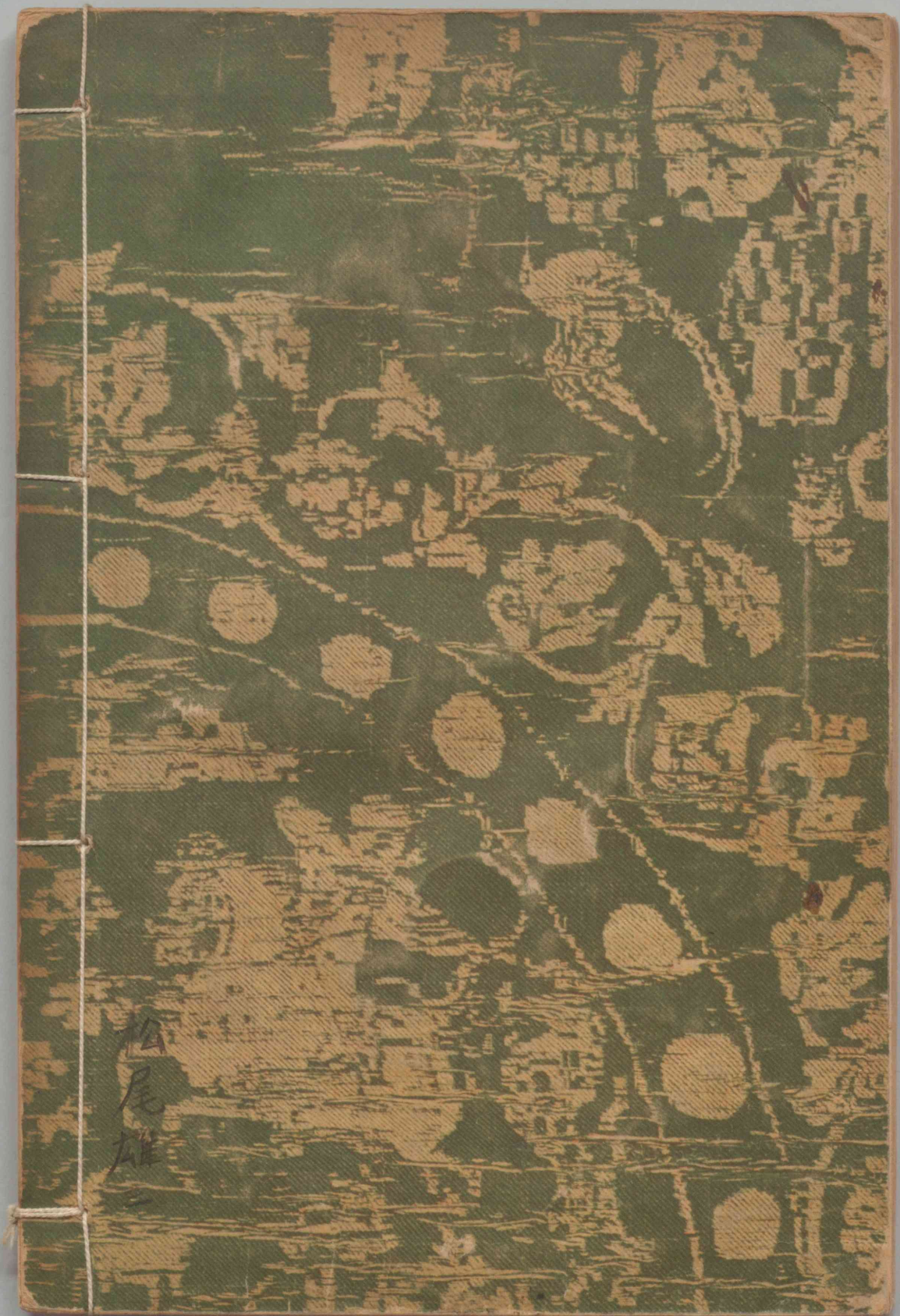
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段一八七〇番
振替口座東京二六二四〇〇番







松尾雄二